

藤 原 遺 跡

1992

建 設 省

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

大野郡久々野町は飛驒地方の中央部に位置し、北端は太平洋側と日本海側の分水嶺をなしています。東西文化の接点ともいべき所に位置する久々野町では、昭和48年より5か年の発掘調査によって、縄文時代の集落の全景が明らかになった国指定史跡の堂之上遺跡からもわかるように、太古より人間の生活の営みがありました。

さて、このたび、国道41号線長淀地区局部改良工事に伴い、藤原遺跡の発掘調査を実施しました。長淀1号橋の工事に際して発見された遺跡ですが、建設省のご協力により、今回の発掘調査に至ることができました。発掘調査は岐阜県教育委員会から再委託を受けた財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

発掘調査の結果、縄文早期の配石遺構や、後期のピット群など、縄文時代の生活の一端を垣間見ることができる遺構が確認されました。また、飛驒地方では初めてほぼ完形に近い状態で見つかった縄文早期の茅山下層式土器、在地型のもの関東系のものが入り交じった後期の土器など注目すべき遺物も多く出土しました。

最後になりましたが、発掘調査および整理・報告書の作成に当たりまして、関係諸機関・各位ならびに地元の皆様のご理解とご協力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

例　　言

1. 本書は、一般国道41号長淀局部改良事業に伴う藤原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省と岐阜県が委託契約を結び、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 藤原遺跡は、大野郡久々野町渚ヲトシロ2680番地の2他に所在する。本遺跡の発掘調査は、平成4年4月1日から平成5年3月31日まで実施した。
4. 調査にあたっての組織は次の通りである。

理事長　　吉田　豊
調査指導　岐阜県教育委員会
指導調査員　大参　義一　（愛知学院大学教授）
調査課長　西村　覚良
調査第2係長　只腰　正知
調査担当者　上嶋　善治
補助調査員　野村　宗作（日本考古学協会会員）
事務局長　山崎　春夫
事務局　小林　哲夫
原田　東支夫

5. 遺物の整理・報告書作成にあたっては、上記の調査担当者のほか下記のセンター職員の協力を得た。
北洞勝臣　宇野治幸　武藤貞昭　川部　誠　安江祥司　各務光洋　佐野康雄
谷口和人　加藤栄二　小谷和彦　千藤克彦　鈴木　昇　藤田英博　長屋幸二
6. 報告書の執筆は、第1章第1節は飛驒教育事務所の岩田修氏に玉稿を頂いた。その他は、上嶋が担当した。
7. 本発掘調査にあたっては、建設省中部地方建設局高山国道工事事務所・久々野町・飛驒県事務所・飛驒教育事務所には、多大な協力を得た。
8. 現地調査・報告書作成にあたっては、下記の方々からご指導とご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
石原哲彌　吉朝則富　岩田　修　増子康真　河野典夫　高樋孝助
9. 発掘調査作業及び整理作業には、下記の方々の参加・協力を得た。（順不同）
鈴木　謙　松森酒造　松森美千代　松森　薰　吉川禮子　吉川理一　小林一茂　佐藤佳苗
矢島和子　佐藤寛子　和仁文江　岩佐　泰　上田千恵子　中田信子　羽根田　稔
西先富子　上嶋裕子

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	5
第2章 発掘調査の経過	8
第1節 調査の方法	8
第2節 発掘調査の経過	8
第3章 遺構	11
第1節 基本的層序	11
第2節 溝状遺構	12
第3節 ピット群	12
第4節 配石遺構	12
第4章 遺物	22
第1節 繩文土器	22
第2節 石器	36
第5章 考察	45
第1節 藤原遺跡のまとめ	45
第2節 久々野町内の縄文遺跡	45
第3節 飛驒の早期条痕文系土器	47
参考文献	52
石器一覧表	53
図版	59

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 遺跡付近の地形・地質	2
第3図 遺跡付近の地形・地質（断面図）	3
第4図 段丘付近の堆積状況（模式図）	4
第5図 久々野町内の遺跡	6
第6図 地区設定図	9
第7図 土層模式図	11
第8図 土層図（トレンチ1～4）	13
第9図 土層図（トレンチ5～8）	14
第10図 土層図（調査区南壁、中央トレンチ）	17
第11図 溝状遺構・ピット群（1）	18
第12図 ピット群（2）	19
第13図 ピット9・10	20
第14図 配石遺構	21
第15図 遺構出土の縄文土器（1）	24
第16図 遺構出土の縄文土器（2）	25
第17図 遺構出土の縄文土器（3）	26
第18図 縄文土器（1）第I群 第II群	28
第19図 縄文土器（2）第I群	29
第20図 縄文土器（3）第III群	33
第21図 縄文土器（4）第IV群	34
第22図 縄文土器（5）第V群 第VI群	35
第23図 石器（1）石鏃 ピエス・エスキュー	39
第24図 石器（2）削器 搓器 U F R F	40
第25図 石器（3）石核	42
第26図 石器（4）打製石斧	43
第27図 石器（5）石錘 磨石・凹石・敲石類	44
第28図 早期条痕文系土器出土遺跡	48
第29図 参考土器 早期条痕文系土器	51

付表目次

第1表 久々野町内の遺跡 7

第2表 石器一覧表 53

図版目次

図版1 1. 発掘前全景 2. 遺跡全景

図版2 1. 調査区南部 2. 調査区北部

図版3 1. 第1トレンチ 2. 第2トレンチ

図版4 1. 第3トレンチ 2. 第4トレンチ

図版5 1. 第5トレンチ 2. 第6トレンチ

図版6 1. 第7トレンチ 2. 第8トレンチ

図版7 1. 調査区南壁 2. 中央トレンチ

図版8 1. 溝状遺構(SD1)・ピット群(1) 2. 溝状遺構(SD2)

図版9 1. SK1 2. SK1(下部) 3. ピット群(2) 4. ピット9・10
5. 作業風景

図版10 1. 配石遺構 2. 繩文土器出土状況

図版11 1・2. 遺構出土の繩文土器(1)

図版12 1・2. 遺構出土の繩文土器(2)

図版13 1・2. 遺構出土の繩文土器(3)

図版14 1. 遺構出土の繩文土器(4) 2. 繩文土器第I群(1)

図版15 1・2. 繩文土器 第I群(2)

図版16 1・2・3. 繩文土器第I群(3)

図版17 1. 繩文土器 第II群 2. 繩文土器 第III群(1)

図版18 1・2 繩文土器 第III群(2)

図版19 1. 繩文土器第III群(3) 2. 繩文土器 第IV群(1)

図版20 1・2. 繩文土器 第IV群(2)

図版21 1. 繩文土器 第IV群(3) 2. 繩文土器 第V群(1)

図版22 1. 繩文土器 第V群(2) 2. 繩文土器 第VI群

図版23 1. 石器 石鏃 石錐 2. 石器 打製石斧

図版24 1. 石器 石錐 2. 石器 磨石類

図版25 1・2. 堂之上遺跡6号住居跡出土土器 3. 堂之上遺跡36号住居跡出土土器
4. 堂之上遺跡26号住居跡出土土器

図版26 1. 堂之上遺跡14号住居跡埋甕 2. 渚遺跡出土土器

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地形・地質

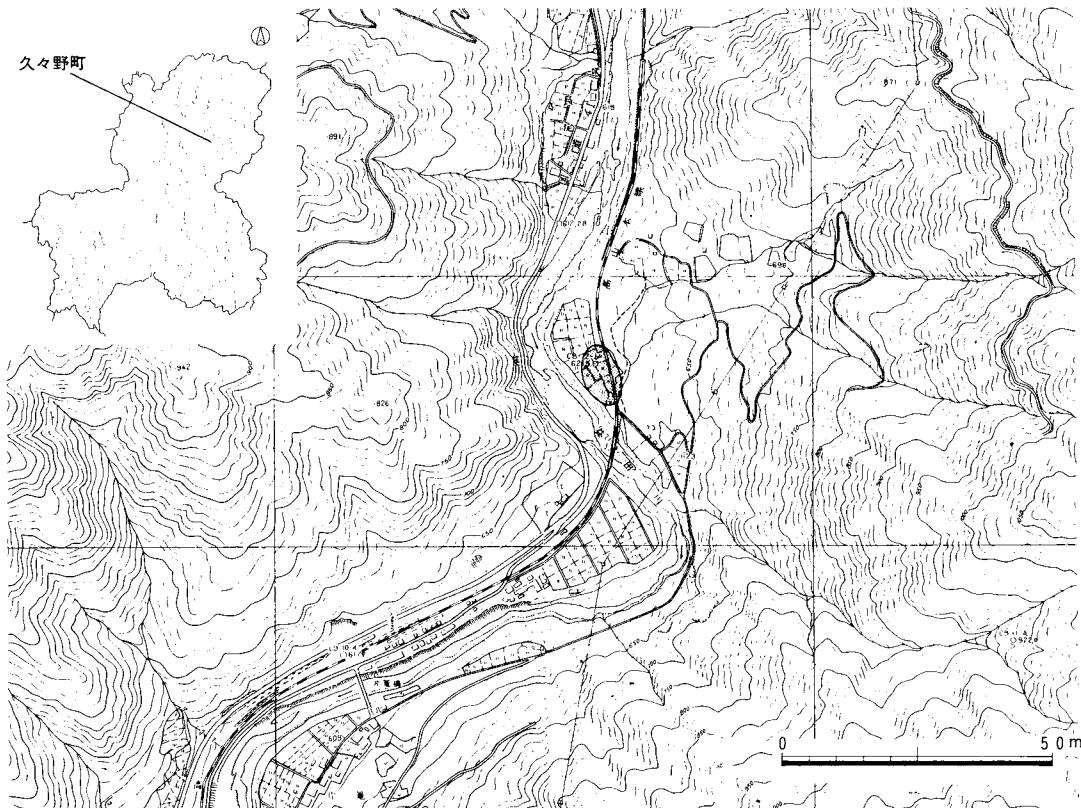
1. 地形

藤原遺跡は、飛騨川の左岸に分布する比高12~15m程の河岸段丘上に位置する。その後背地に、周囲の山地と比べてやや緩やかな斜面を有しているのを特徴とする（第2図）。

河岸段丘は、飛騨川が曲流するに伴ってその反対側に形成されている。段丘面はあまり平坦ではなく、山地から川側に向かって傾斜している。段丘面は最近まで耕地として利用され、人為的に何段かの階段状に耕地が作られてきている。

河川堆積物は厚さ3m以下で薄層としてのり、濃飛流紋岩類を基盤とする岩石段丘に分類される。

後背地には海拔1200m程の山地があり、段丘面の海拔620m程と比べて高度差600mの地形となっている。前述のように、ここには河岸段丘の背地が緩斜面となっている。2本の谷川に沿っていて扇状地状にも見えるが、地形や礫の分布から考えて大規模な崖錐であり、崩積堆積

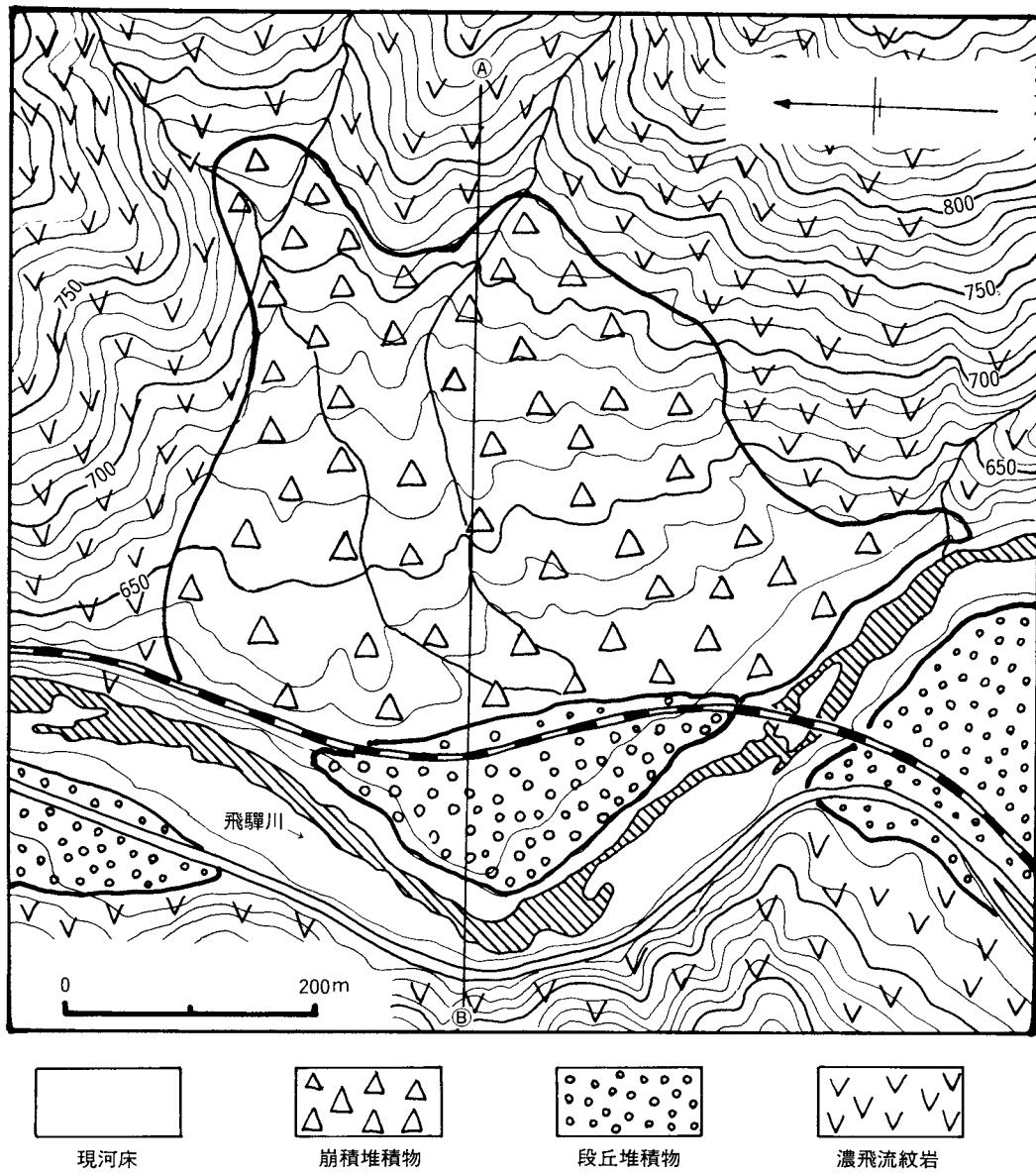


第1図 遺跡の位置

したものであると考えられる。

第3図は第2図上のA-B断面を示しているが、ここでは海拔720m位から傾斜がゆるやかになり、飛騨川沿いの河岸段丘へ漸移していく。崩積堆積と段丘との区別は明確でない。

後背山地は大きさ1m前後の角礫が分布している。ところによっては岩盤も見られ、堆積物の厚さは一定でないがそれ程厚くないと思われる。



第2図 遺跡付近の地形・地質

2. 地 質

〈基盤岩〉

第2図に地質及び地形区分を示しているが、本遺跡周辺は、濃飛流紋岩類の分布域に含まれる。濃飛流紋岩類は、岐阜県、長野県などにまたがって広大な面積と体積を占め、飛驒でも最も広く分布している岩石である。種類として溶結凝灰岩を主とした流紋岩、流紋ディサイト岩が卓越している。噴出年代は、中生代白亜紀末の約7000万年前頃である。

本遺跡周辺の濃飛流紋岩類は、舟山溶結凝灰岩層（厚さ1000m以上）に相当し、斜長石や苦鉄質鉱物の結晶の目立つ流紋ディサイト質の溶結凝灰岩を主とする¹⁾。本地域では、長石や石英の大きな斑晶が目立つ粗粒な岩石であり、角閃石や黒雲母なども含まれている。（今後この岩石は濃飛流紋岩と呼ぶ）

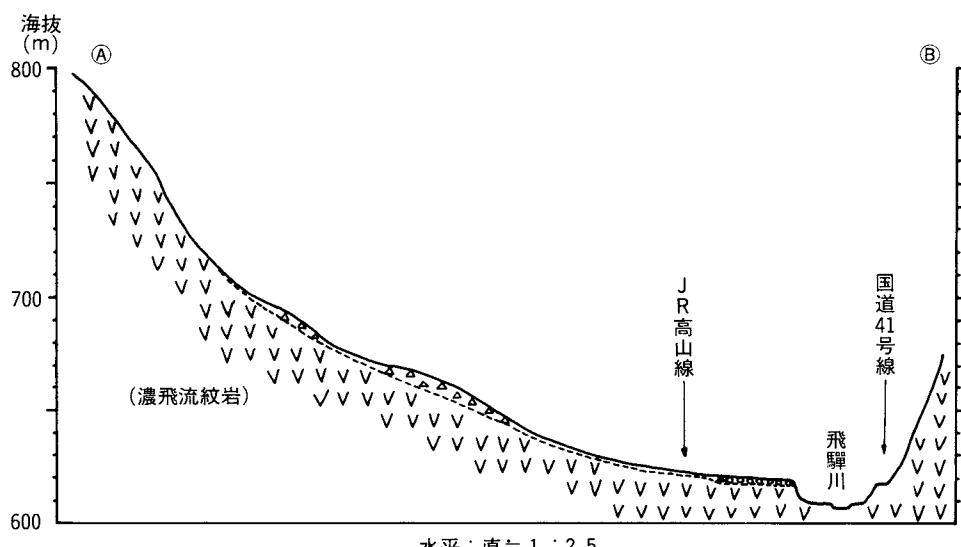
〈崩積堆積物〉

本地域の後背山地からの崩積堆積物は、濃飛流紋岩の角礫からなる。礫は1m前後であり、マトリックスは同質の細礫などで淘汰は非常に悪い。岩石類は均質であり、同類の粗粒な岩石である。露頭でみられるものと同一で、崩積したものであることを裏付ける。

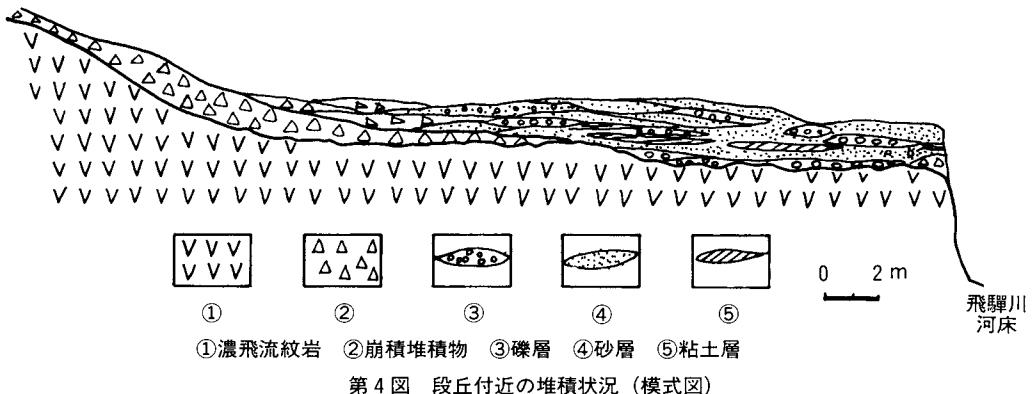
本地域の河岸段丘の基盤もこの種の濃飛流紋岩である。河床からの段丘崖で観察でき、やや風化して赤みをおびている。

〈段丘堆積物〉

本遺跡は河岸段丘上に位置しているが、段丘堆積物として、礫層、砂層、粘土層、段丘砂礫層などが基盤岩の濃飛流紋岩上に薄くのっている。



第3図 遺跡付近の地形・地質（断面図）



第4図 段丘付近の堆積状況（模式図）

磯層は厚くとも5m程であり、河川側から離れるに従い段丘砂礫層は薄くなると共に崩積堆積物が卓越してくるようになる。

第4図に模式的な堆積状況を示した。河川堆積物としての段丘砂礫層は、地質としての連続性が悪く、水平方向への変化が著しくてレンズ状の層として分布しているのが多い。砂層の中にも礫が混入するなど地層として安定していないことがある。段丘上での場所によっても変化が著しく、不安定な堆積状況を示している。このことは、変動の激しい堆積環境を予想させる。

基底には礫層が多く、大きさ50cm程の亜円礫となっていることもあるが、全体的には砂層が多く、粘土層は部分的である。

礫種は、濃飛流紋岩類が90%ほどを占める。花崗斑岩も含めて各種の濃飛流紋岩が見られる。チャート、砂岩、泥岩などの美濃帶堆積岩の礫（10cm以下が多い）の他、安山岩礫も見られるが、乗鞍起源も含めて各種の火山活動からもたらされたものである。

3. 考察

河川堆積物の上下に後背山地からの崩積堆積物が堆積している所が観察される。このことは、後背山地からの崩積の時期と段丘堆積、段丘化の時期が重なっていることが考えられる。

本地域周辺では、スキー場となっている舟山東斜面や万石南方の黒手山付近に緩斜面が形成され、そこには崩積堆積物が発達しているが、その成因として、最終氷期に風化作用で形成された濃飛流紋岩の角礫がソリフラクションで移動してつくられたと考えられている²⁾。最終氷期に大量に形成された風化物が河川などに堆積し、後氷期になって気候変動によって浸食力、運搬力が増大して、崩積物の堆積と河岸段丘形成が進められたと考えると、本地域の地形形成が説明付けられる。段丘堆積物の堆積環境の変動の大きさもそれを裏付けている。

現在は表面を植相がおおい、近年になって後背山地が崩壊した様子は見られない。先土器時代、縄文時代の初期頃はまだ活動があったことが予想される。

(註)

- 1・2) 山田直利・足立 守・梶田澄雄・原山 智・山崎晴雄・豊 邑秋 (1985)『高山地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所

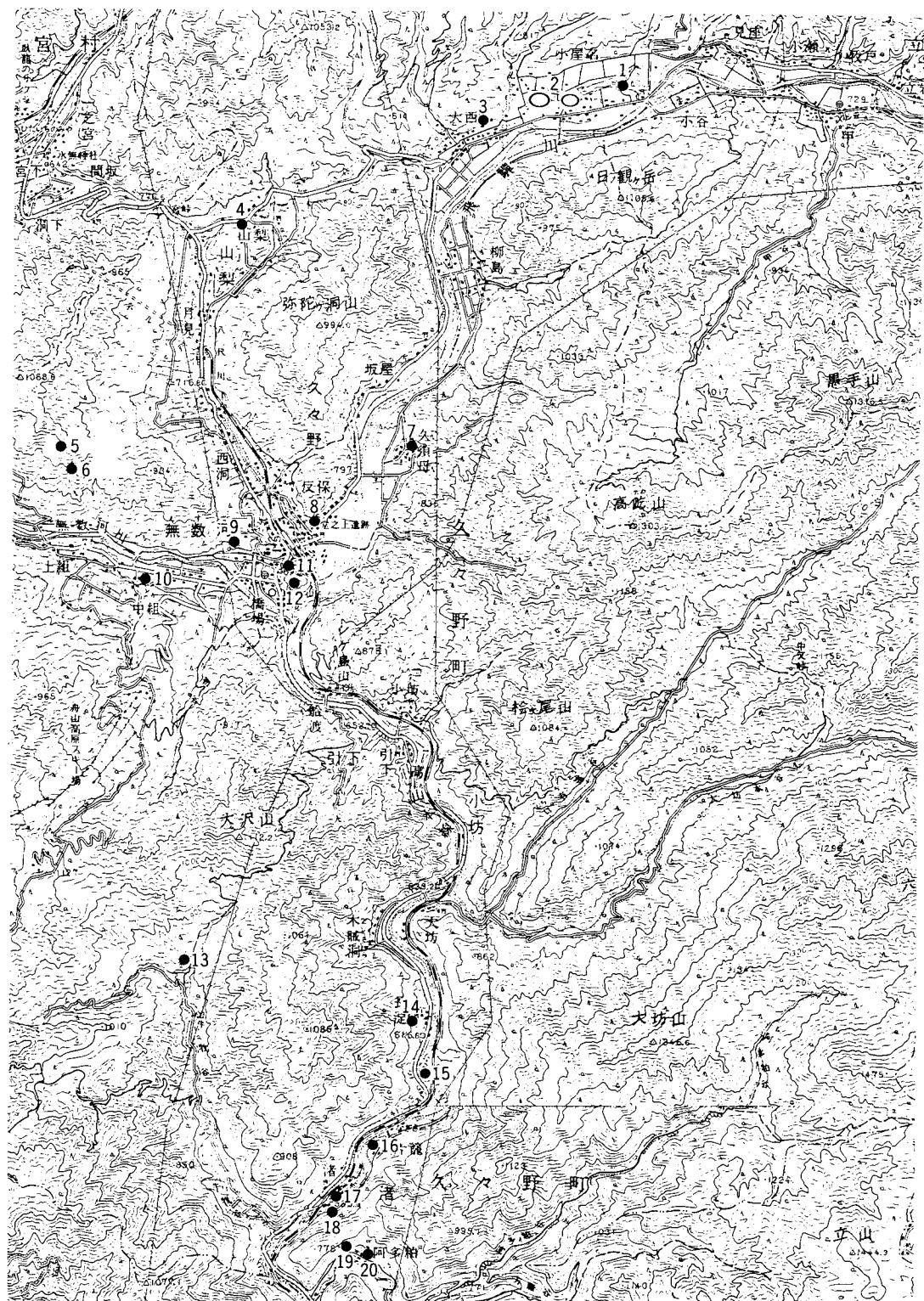
第2節 歴史的環境

久々野町内では、先土器時代の遺跡・遺物は発見されていない。縄文時代の遺物としては、早期から晩期までの各時期のものが見つかっている。縄文土器については、第5章で詳述するが、堂之上遺跡で、押型文土器が出土している。堂之上遺跡は、昭和48年から昭和54年まで7次にわたる発掘調査が行われ、前期から中期末までの住居跡43軒と数多くの遺物が出土した¹⁾。その結果、飛驒地方では画期的な、縄文時代の集落全体の様相が窺える貴重な遺跡であることが判明し、昭和55年に国の史跡に指定された。その他、前期の遺跡としては、山腰遺跡、釜野遺跡がある。中期には、いわゆる手焙形土器が見つかっている渚遺跡があり²⁾、後期の遺跡としては、釜野遺跡がある。

弥生時代の遺跡として、棚山遺跡がある³⁾。古墳は発見されていないが、須恵器が、小屋名・反保で発見されている。律令制下では、大野郡の阿辯郷に属していたと考えられる。古代の状況を窺う史料はまったくない。

(註)

- 1) 文献 久々野町教育委員会 (1978) (1980)
- 2) 文献 江馬 (1937)
- 3) 『岐阜県遺跡地図』によると、縄文の散布地となっているが、『岐阜県史』によると、弥生土器出土地となっている。



第5図 久々野町内の遺跡

第1表 久々野町内の遺跡 (岐阜県教育委員会『岐阜県遺跡地図』1990をもとに作成)

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺跡の概況
1	来迎寺跡	大野郡久々野町小屋名清水	寺院跡	室町	町史跡 昭和37. 8.25指定
2	釜野遺跡	大野郡久々野町小屋名段	散布地	縄文	昭和43年圃場整備により一部滅失
3	山腰遺跡	大野郡久々野町大西山腰	散布地	縄文	昭和43年圃場整備により一部滅失
4	山梨遺跡	大野郡久々野町山梨与左衛門	散布地	縄文	
5	城側城跡	大野郡久々野町無数河	城館跡	室町	町史跡 昭和37. 8.25指定
6	茂谷遺跡	大野郡久々野町無数河茂谷	散布地	縄文	
7	久須母遺跡	大野郡久々野町久須母森ノ上	散布地	縄文	昭和41年圃場整備により一部滅失
8	堂之上遺跡	大野郡久々野町堂之上	集落跡	縄文	昭和48~54年発掘調査 国史跡 昭和55. 3.24指定
9	丸草遺跡	大野郡久々野町無数河丸草	散布地	縄文	
10	中組遺跡	大野郡久々野町無数河小畑	散布地	縄文	
11	棚山遺跡	大野郡久々野町棚山	散布地	弥生	
12	牛臥山城跡	大野郡久々野町無数河城下	城館跡	室町	町史跡 昭和37. 8.25指定
13	牛牧遺跡	大野郡久々野町渚牛牧	散布地	縄文	
14	長淀遺跡	大野郡久々野町長淀筏場	散布地	縄文	
15	藤原遺跡	大野郡久々野町長淀	散布地	縄文	
16	片籠遺跡	大野郡久々野町渚上林	散布地	縄文	
17	渚遺跡	大野郡久々野町渚奥垣内	散布地	縄文	
18	渚口留場所跡	大野郡久々野町渚向山	番所跡	江戸	町史跡 昭和59.12.26指定
19	阿多柏口留場所跡	大野郡久々野町阿多柏下平	番所跡	江戸	町史跡 昭和37. 8.25指定
20	阿多柏遺跡	大野郡久々野町阿多柏道下	散布地	縄文	

第2章 発掘調査の経過

第1節 調査の方法

本遺跡の位置する段丘は、飛驒川とJR高山本線で区切られているが、今回の道路建設現場はJR線に平行した地点である。そこで、遺跡の範囲を確認するために、道路幅に合わせて、南から第1～第8のトレントを入れた。その結果、第2トレント以北は、遺構・遺物の存在の可能性がきわめて低いと推定された。従って、第2トレント以南を平面掘りすることにした。

地区の設定は4m×4mのグリッドで、西から東にA列・B列・C列…、南から北に1列・2列・3列…とした。方位は、真北に合わせてある。

北東が高く、南西が低い地形であるが、6列のあたりから北は一段高くなっている。この上段は、遺物包含層が比較的薄く、出土遺物も少量であった。下段からは、後述するように、IV層を掘り込んだ状況で溝状遺構・ピット群などが検出された。さらに下層から遺物が出土するので、記録して掘り下げることにした。VI層を掘り込んだ状況でピット群が検出され、さらに下層から遺物が出土するので、同様に掘り下げることにした。VII層の直上で配石遺構が検出された。

第2節 発掘調査の経過

5月21日に調査始め式を行ったが、その前に、調査地点の範囲確認のため、8本のトレントを入れた。雨天時は、久々野町歴史民俗資料館にて整理作業を行い、8月11日に調査納め式を行った。以下、週ごとに調査経過の概要を記す。

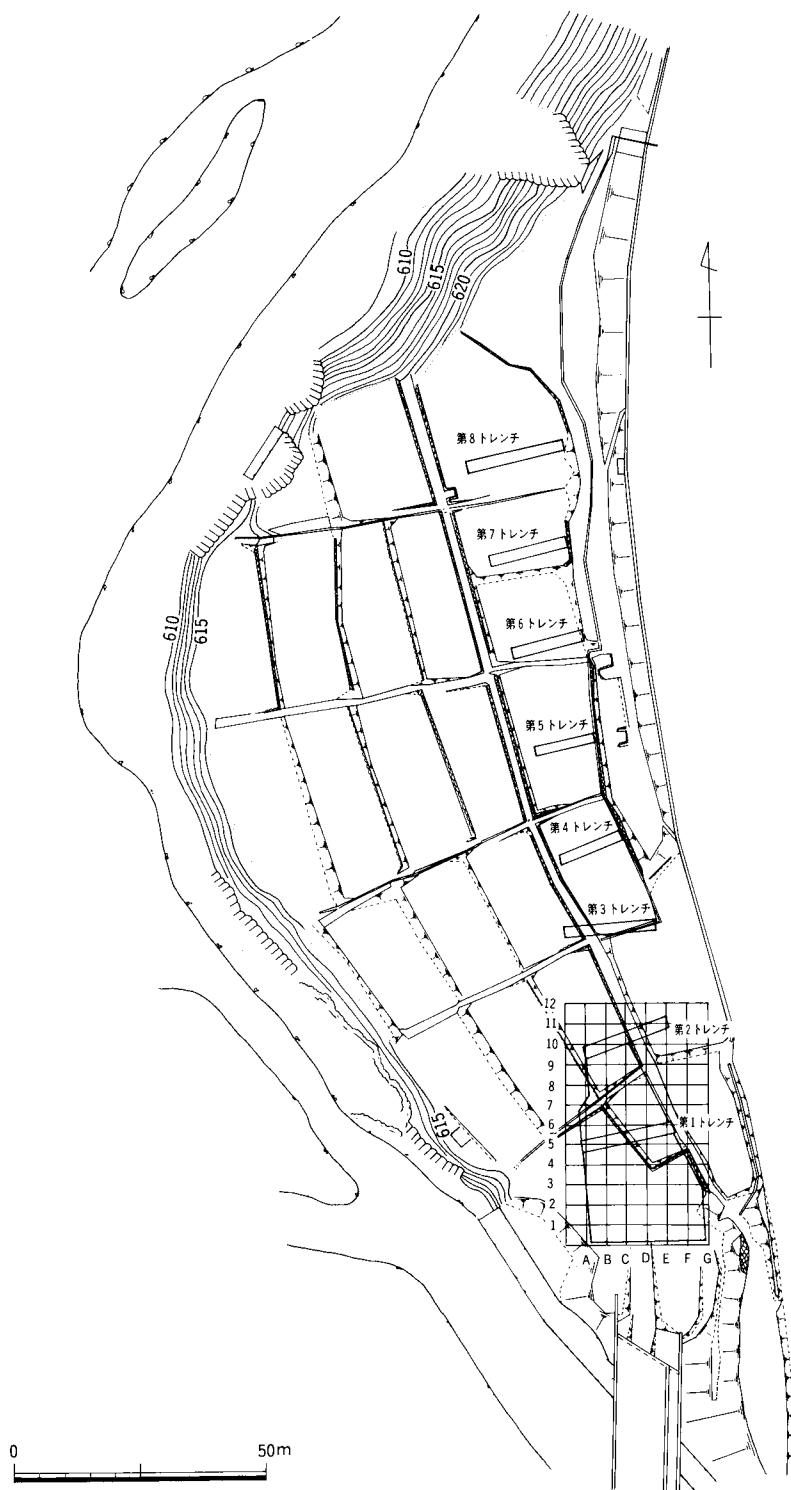
第1週(5.9～5.15) 現場事務所の設置および用具の搬入を行った。第1～8トレントの掘削を行い、杭打ち作業を進めた。

第2週(5.18～5.22) 第1トレントの清掃および観察。固く締まった層があり作業が難航する。5月21日に調査始め式を実施した。表土の除去および第III層の掘削作業を進め、加曾利B式の土器を検出した。

第3週(5.25～5.29) B・C列で、ピット群および溝状遺構(SD1)を検出し、掘削も進めた。F列は礫の流れ込みが激しい。

第4週(6.1～6.5) 土坑(SK1)および溝状遺構(SD2)を検出した。7列以北の掘削にかかった。

第5週(6.8～6.12) 南部のB・C列でIV層を掘り込んだ状態でピット群を検出。北部は、



第6図 地区設定図

遺物包含層の黒褐色土は西側に厚く、東側が薄い。

第6週(6.15～6.19) 第3～8トレンチの壁面の清掃および写真撮影・実測作業を進めた。D・E列では、IV層より下層に黒褐色土層(V層)があり、縄文中期の土器等が出土した。

第7週(6.22～6.26) 西側(B・C列)のVI層を掘削する。縄文早期の土器等が出土した。東側(D・E・F列)では、各層位が南側に傾斜している様子が観察された。

第8週(6.29～7.3) D1・2区で配石遺構を検出した。B1区～C1区にかけて東西トレンチを、C1～3区にかけて南北トレンチを入れた。

第9週(7.6～7.10) F・G列の掘削。礫を取り除きながらの作業となる。第V層より縄文土器等が出土。

第10週(7.13～7.17) D列第VI層の掘削。D4区で、茅山下層式の土器片が集中して出土した。

第11週(7.20～7.24) 調査グリッドの南壁セクションの実測。中央の土層観察畦を撤去し、写真撮影の準備を進めた。

第12週(7.27～7.31) 空中写真撮影を実施。排土の処理のため一部埋め戻し作業を行った。久々野町歴史民俗資料館にて、出土遺物の整理作業を進めた。

第13週(8.3～8.11) 久々野町歴史民俗資料館にて、出土遺物の整理作業を継続した。特に、茅山下層式土器の復元作業を中心に行った。8月10日に記者発表し、8月11日に調査納め式を実施した。

以後は、久々野町歴史民俗資料館およびセンターにて整理作業を継続し、報告書の執筆にかかった。

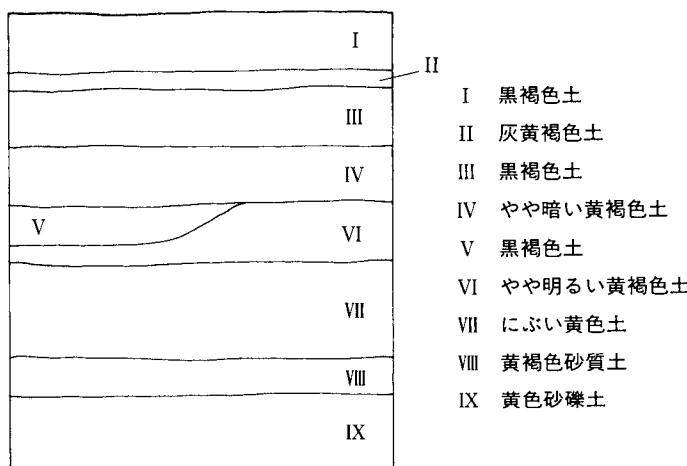
第3章 遺構

第1節 基本的層序

本遺跡は、飛驒川左岸の河岸段丘上に立地する。地形・地質の詳細は前章で述べた通りであるが、調査地点は、地形的に北東から南西に傾斜しており、複雑な層位を示している。発掘区の南壁を参考に基本的な層位の模式図を示すと第7図のようになる。

第I層は、耕作土で黒褐色を呈する。約30cmの厚さである。第II層は、いわゆる敷土層で、灰褐色土で、赤褐色化している部分もある。第III層は約30cmの黒褐色土層で、縄文後期の遺物が出土している。第IV層は、約30cmのやや暗い黄褐色の砂質土層である。この層を掘り込んで、上層の遺構群がある。第V層は発掘区の東側に見られる黒褐色土で縄文中期の遺物が出土している。第VI層は約30cmのやや明るい黄褐色の砂質土層で、この層を掘り込んで、下層の遺構群がある。また、この層中より、茅山下層式の復元可能な土器が出土した。第VII層は、にぶい黄色を呈する砂質土であるが、非常に固く締まった層である。この層の上で、配石遺構が検出された。さらに下層は、第VIII層の明黄褐色砂質土、第IX層の黄色砂礫層とづく。

各トレンチの状況を見ると、北へ行くほど特に第7トレンチ以北では、耕作土直下で黄褐色土が現れ、遺構・遺物の存在の可能性はない。第6トレンチより南の方では、西よりに黒褐色土の堆積が見られるが、明らかな埋土もあり第2トレンチ以北は遺構・遺物の存在の可能性は低いと判断した。



第7図 土層模式図

第2節 溝状遺構（第11図）

第IV層を掘り込んだ状況で溝状遺構が2か所検出された。SD1はB3区からC3区にかけて、南側に湾曲しながら東西方向にのびており、東端は消失し、西端は調査区外になっている。幅は約25~40cmで、深さは約10cmである。遺物は検出されなかった。

SD2はB1区からC1区にかけて、SD1と同様に南側に湾曲しながら東西方向のびている。東端は消失している。B1区で二股に分かれているが、南端、西端ともに調査区外に向かっている。幅は約40~50cmで、深さは約15~20cmである。南側がやや深くなっている。遺物としては覆土から、後述する縄文土器（第14図1~9）が出土した。縄文中期から後期のものと思われるが、出土状況から見て構築された時期を決定することはできない。また性格も不明である。

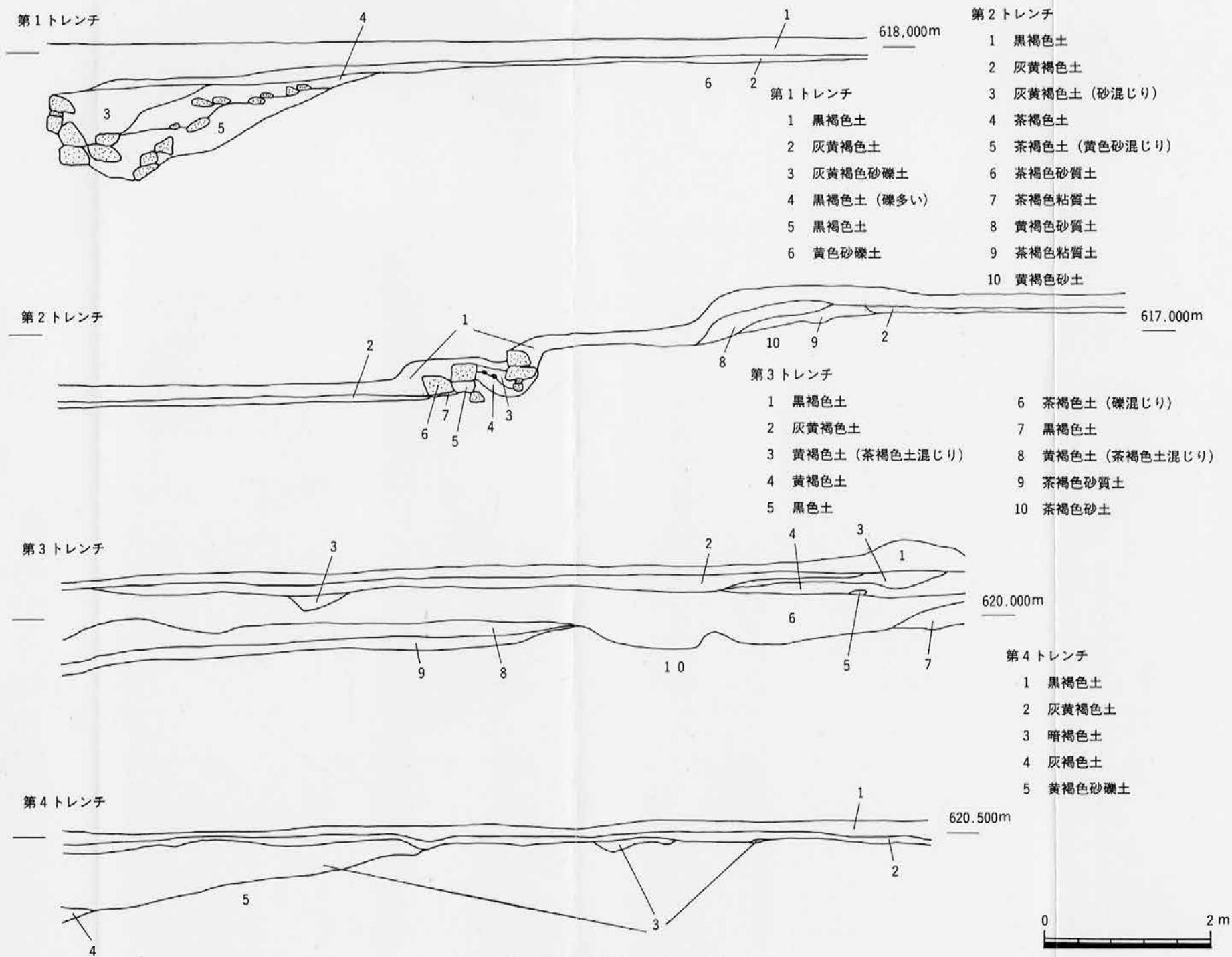
第3節 ピット群（第11・12図）

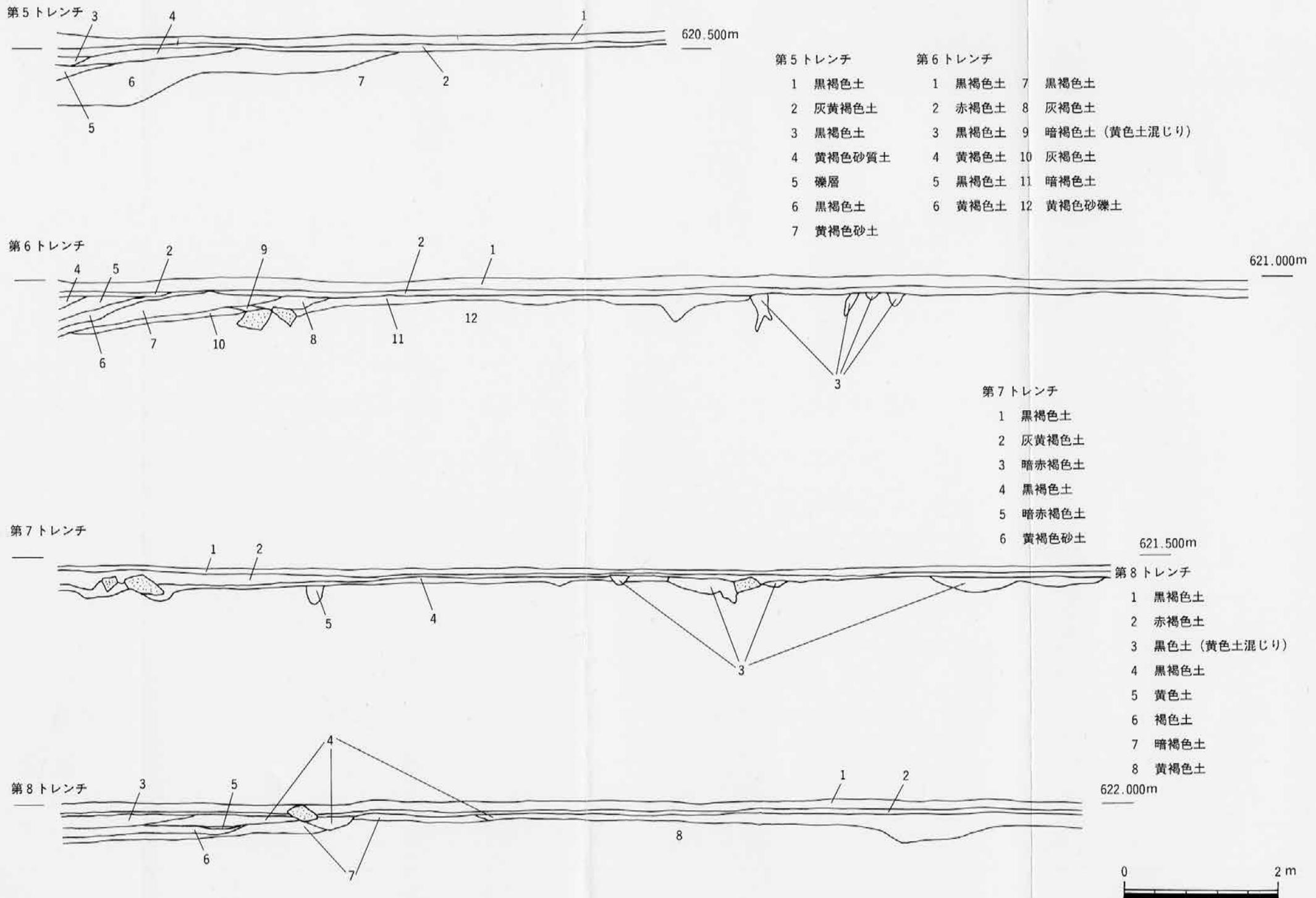
溝状遺構とともに、第IV層を掘り込んだ状況で、調査区の西側からピット群が検出された。直径は約40cmから110cm、深さは約30cmから50cmのものである。検出された状況から見て、柱穴の可能性はないと思われる。いくつかのピットの覆土からは縄文土器が出土した。後述するように、中期から後期にかけてのものと思われるが、ピットの多くは後期に構築されたものであろう。SK1と記号化した土坑は直径約140cm、深さ約70cmで、炭化物や焼土を伴う。下部は堅い第VII層を掘り込んでいて、打製石斧で掘った痕跡かと推定される跡も確認された（図版9）。遺物は覆土より縄文土器片と剥片類が出土した。構築された時期は不明であるが、やはり、後期の所産であろう。IV層以下からも遺物が出土するので掘り下げることにした。

第VI層を掘り込んだ状況でふたたびピット群が検出された。この下層のピット群も後期のものと考えられる。直径が約35cmから90cm、深さが約10cmから20cmのものが多く、上層のものより全体に小さい。しかし、ピット9・10は土壤の可能性がある（第13図）。前者は長径95cm、短径80cm、深さ38cm、後者は直径110cm、深さ28cm。遺物はともに出土していない。

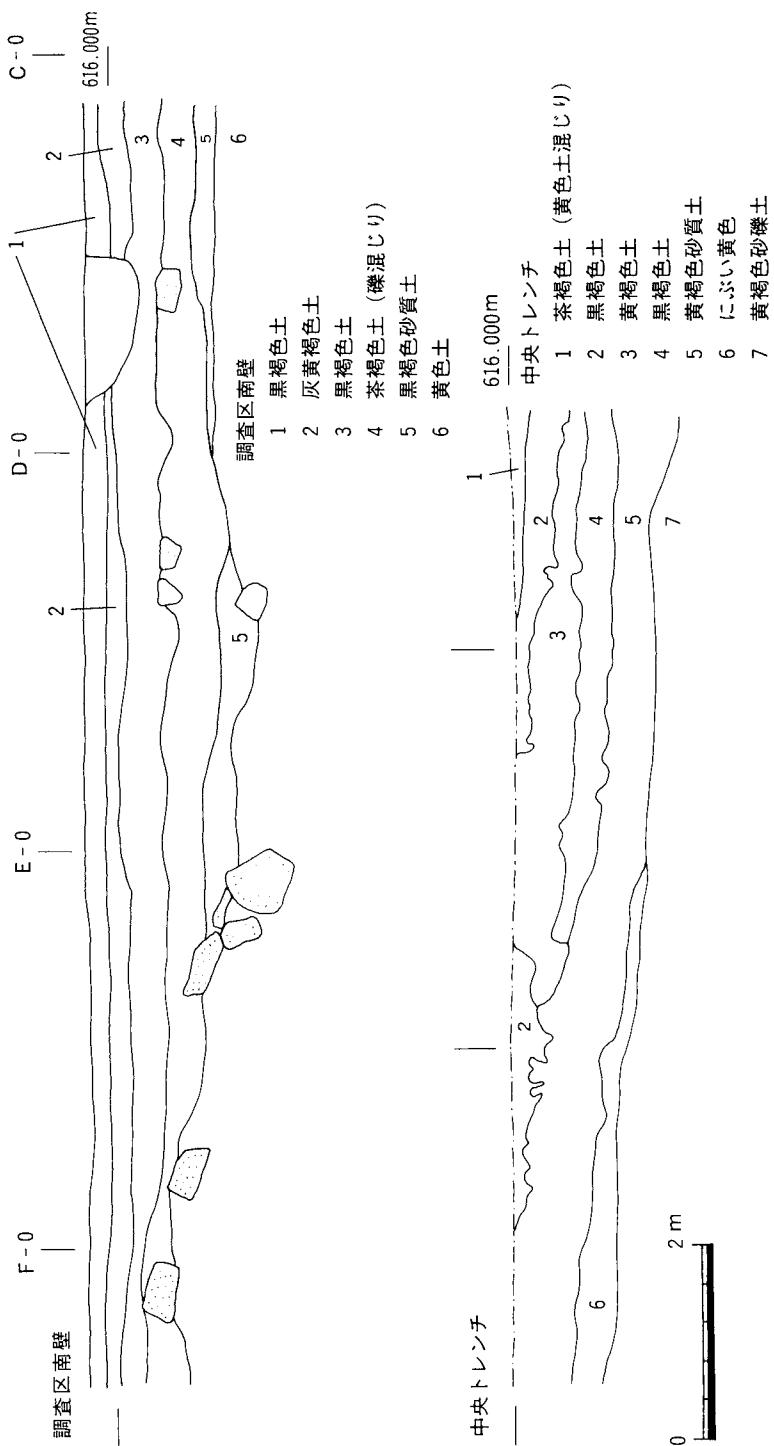
第4節 配石遺構（第14図）

D1区からD2区の西側で、第VII層の直上から配石遺構が検出された。最大幅80cm、最大長250cmにわたって南北方向にやや長く広がっている。円礫や角礫で、石の大きさは、拳大から人頭大と大小様々で、火熱を受けているものが多くあり、割れた石も見られた。縄文早期のいわゆる集石炉が飛驒地方でも見つかっているが¹⁾、いずれも掘り込みがある。しかし、本例は掘り

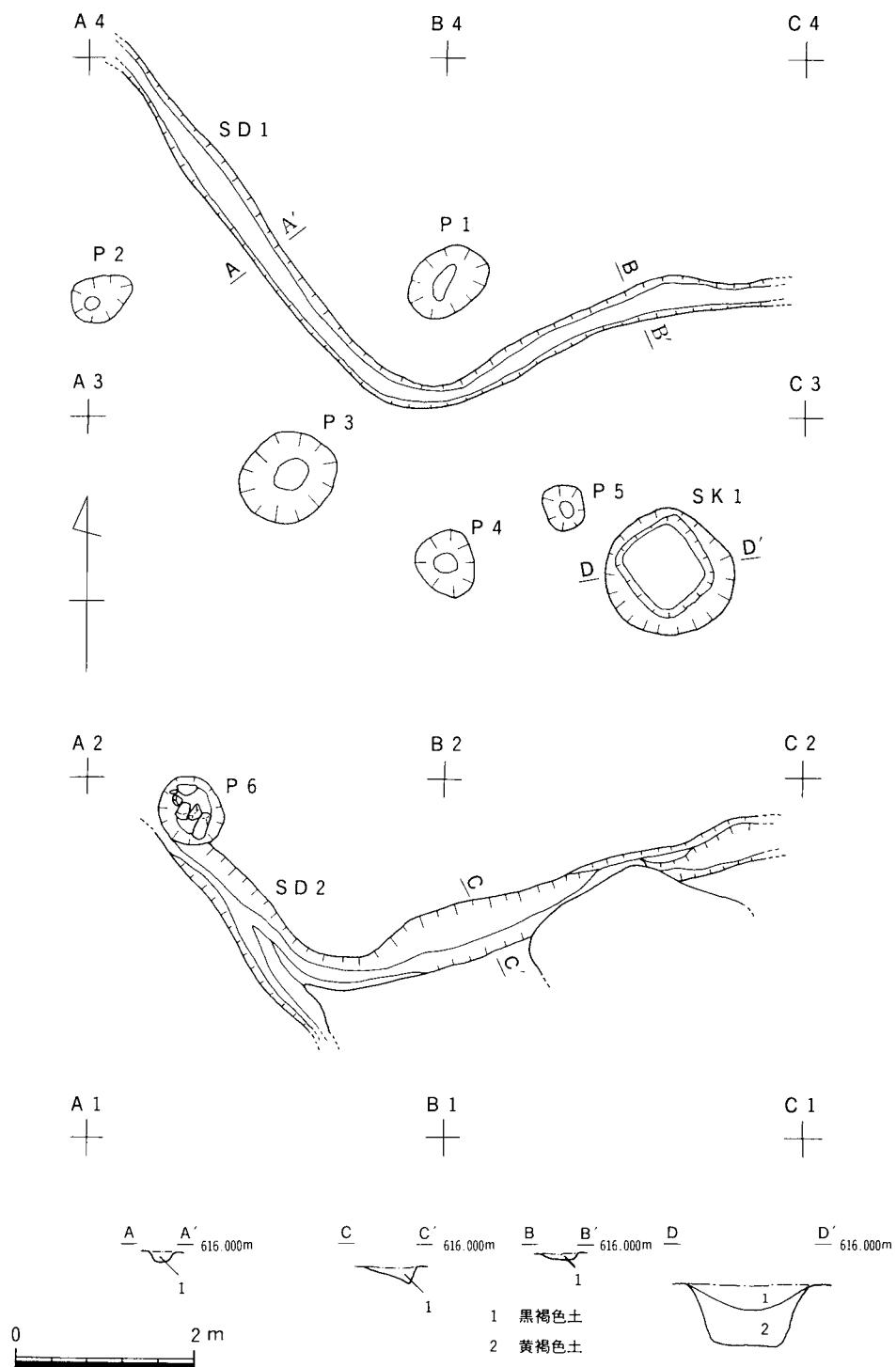




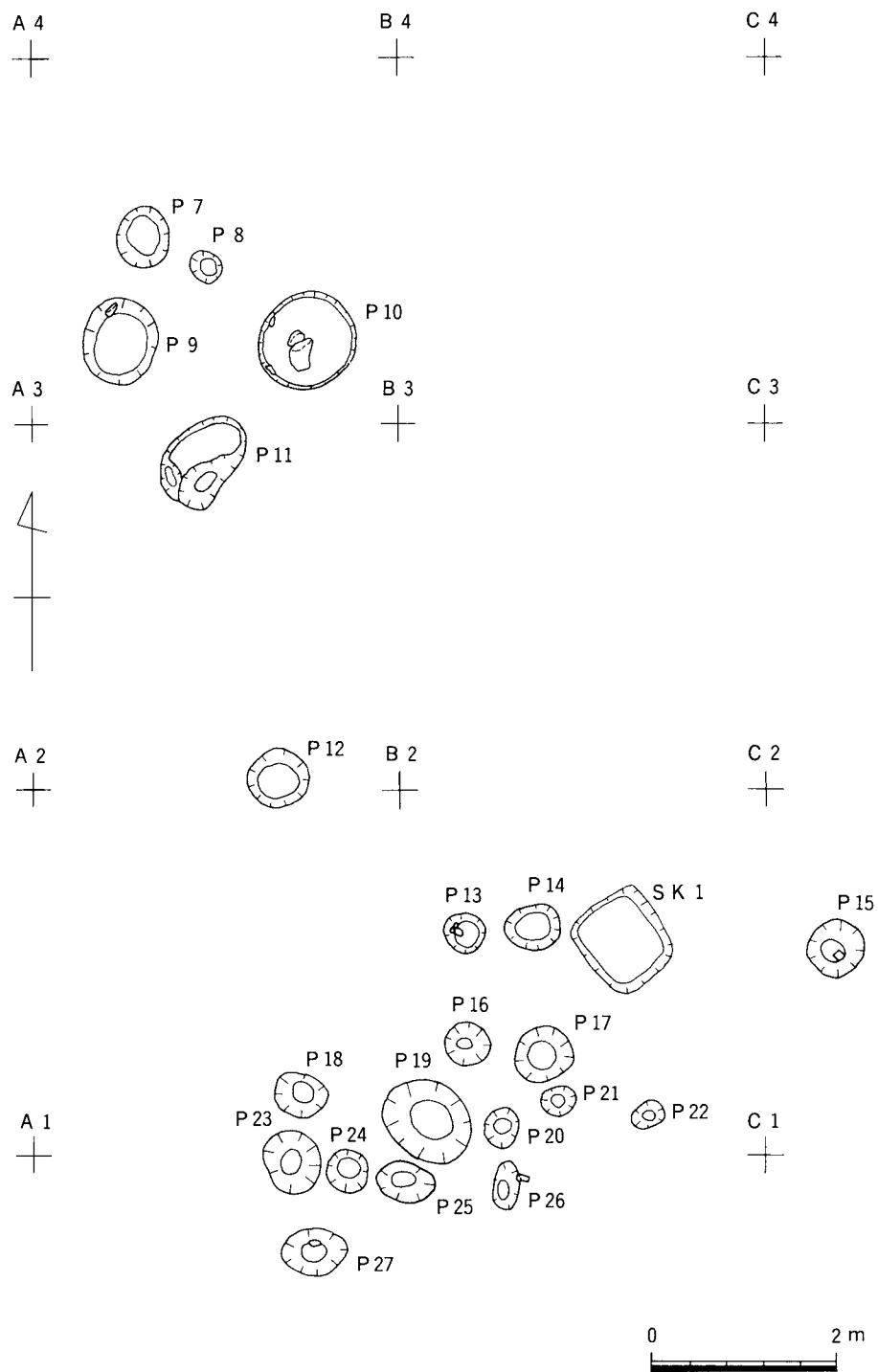
第9図 土層図（トレンチ5～8）



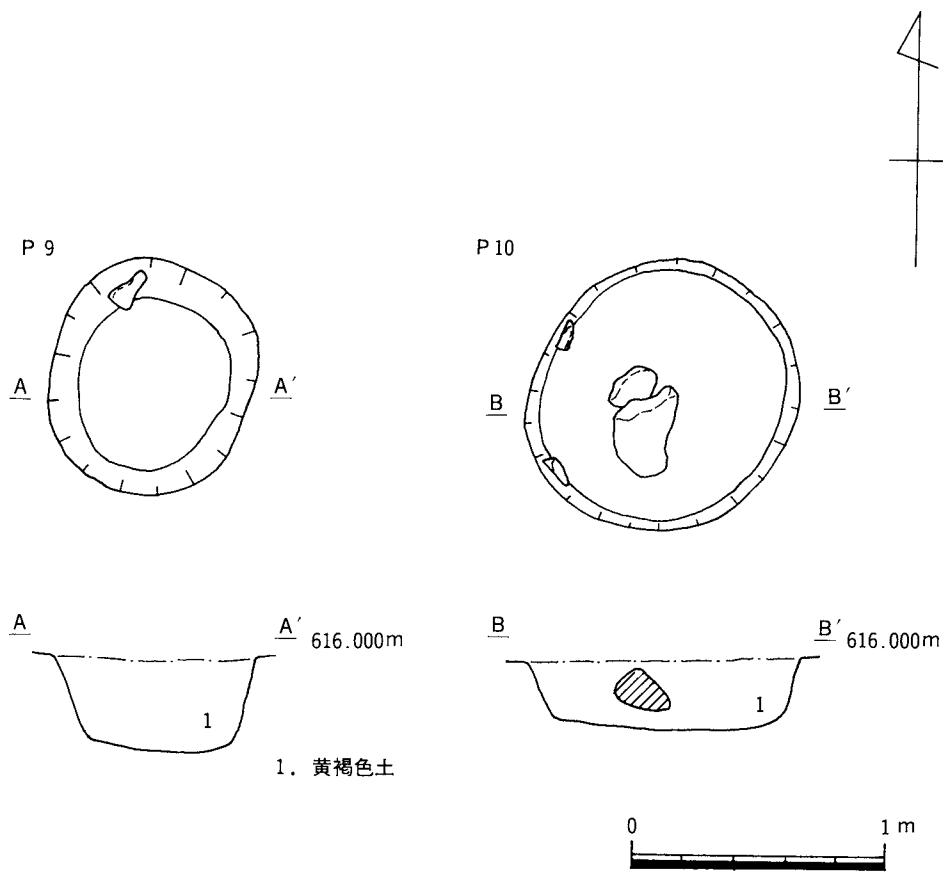
第10図 土層図（調査区南壁 中央トレンチ）



第11図 溝状遺構・ピット群(1)



第12図 ピット群(2)

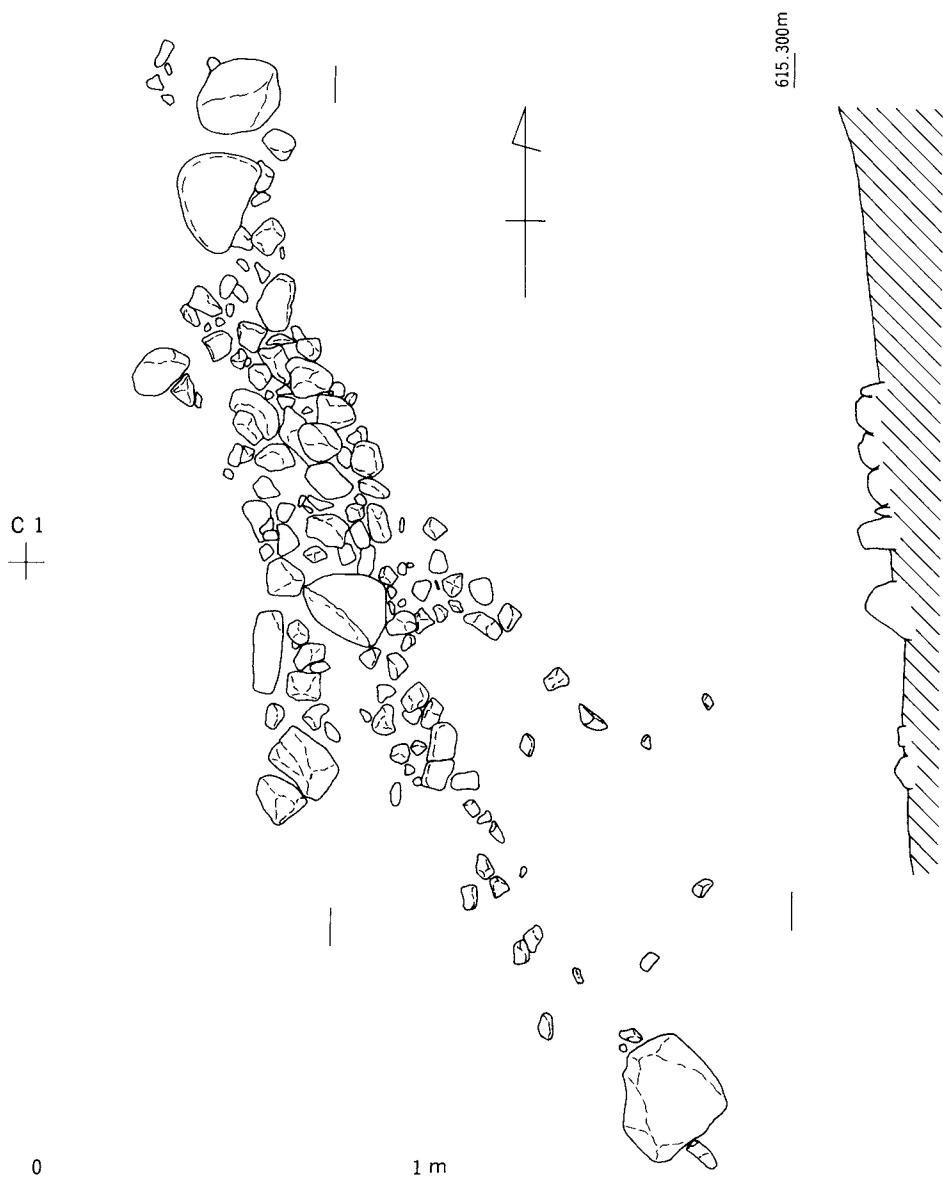


第13図 ピット9・10

込みがなく異なるものと考えた。いわゆる「焼礫集石遺構」の中には、掘り込みがなくて焼礫が広がっている遺構の例もある。層位的にみて縄文早期のものではないかと推定しているが、現段階では、詳しい時期・性格とも不明である。今後の課題としたい。

(註)

1) はつや遺跡、水口遺跡など。



第14図 配石遺構

第4章 遺物

第1節 繩文土器

縄文早期から後期にかけてのものが約1000点見つかっている。器形が復元できるものはごくわずかでほとんどが破片である。型式および施文などから次の6群に分類した。

I群 早期の土器

- 1類 黒鉛入り土器
- 2類 押型文土器
- 3類 表裏縄文土器
- 4類 繊維を含む土器

II群 木島系土器群

III群 中期の土器

- 1類 西日本系の前葉の土器
- 2類 北陸系の前葉の土器
- 3類 中葉の土器
- 4類 後葉の土器
- 5類 無文土器

IV群 後期の土器

- 1類 宮田式土器
- 2類 磨消縄文を施すもの
- 3類 沈線を施すもの
- 4類 凹線文系の土器
- 5類 その他の土器

V群 縄文のみのもの

VI群 時期・型式等不明の底部

遺構に伴うものは、ピットおよび土坑の覆土のものであるが、中期から後期にかけてのものが少量あるだけである。第III層および第IV層から後期のものが出土している。早期のものは第V層以下から出土している。完形品はなかったが、ある程度器形が推定できるものが、P 4とP 23から出土し、第VI層から条痕文系の茅山下層式土器がまとめて出土した（図版16）。

最初に遺構出土のものを記述し、その後、群別に記述を進める。

S D 2 出土の縄文土器（第15図1～9、図版11）

1は口縁部に沈線が2本横走し、2は円弧状に沈線で区画された中に2本縦に沈線が見られる。3～8は縄文のみであるが、5は羽状になるかもしれない。9は丁寧に磨いた無文のもので黄褐色を呈する。6・7などは厚さが7mmとやや厚く、中期のものと推定されるが、1・2・9などは、後期のものであろう。

S K 1 出土の縄文土器（第15図10～12、図版11）

いずれも縄文のみであるが、11は無文部もあり、12は羽状を呈するかもしれない。

P 1 出土の縄文土器（第15図13、図版11）

R Lの縄文を施し、器厚は7mm、黄橙色を呈する。

P 2 出土の縄文土器（第15図14～19、図版11）

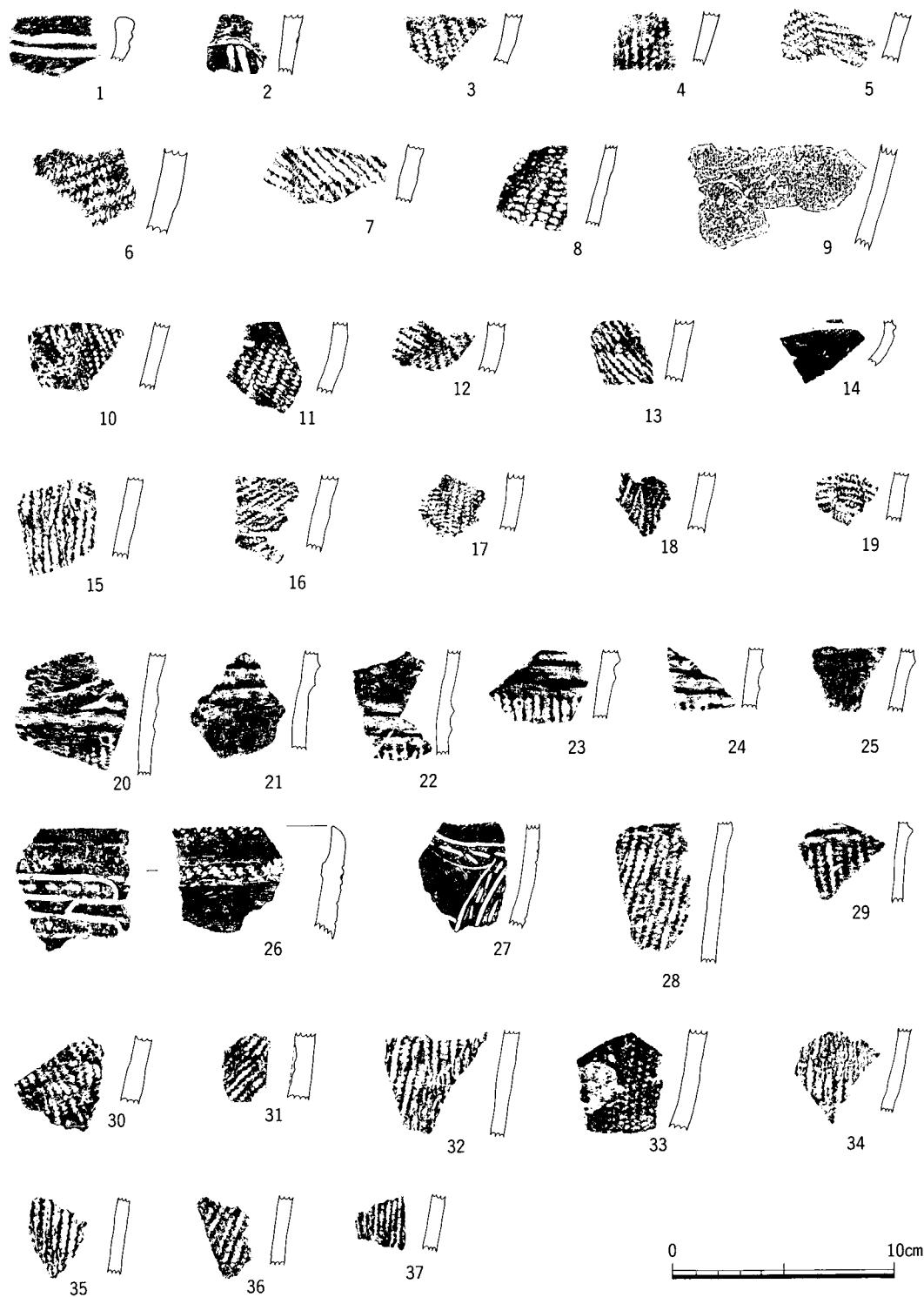
14は横走する隆帯の下に沈線が伴い、粒の小さい縄文があって磨消縄文となっている。15～19はいずれも縄文のみである。

P 3 出土の縄文土器（第15図20～37、図版11）

20～25は第IV群1類土器で、「宮田式」と呼ばれているものである¹⁾。断面三角形の微隆起線文が展開し、その下の部分に縄文が縦走する。26は内側に尖った口縁部で、2本1組の沈線が横走し段違いで区画している。2本の沈線内には刺突が連続している。口唇に縄文が施文されており、口縁内面に隆帯が巡り、やはり、縄文が施文してある。後期前葉のものであろう。27は、2本の沈線で区画され、その中に26のものよりは細長い刺突が連続する。28～37は縄文のみのものであるが、29は上記の「宮田式」のものかと思われる。

P 4 出土の縄文土器（第16図38、図版12）

口縁部は、推定で口径32cm、「く」の字形に屈曲し、口唇は平坦である。胴下半部は欠失しているが、直線的にすぼまる器形である。口縁部の文様は、曲線で区画された磨消縄文で、逆「つ」

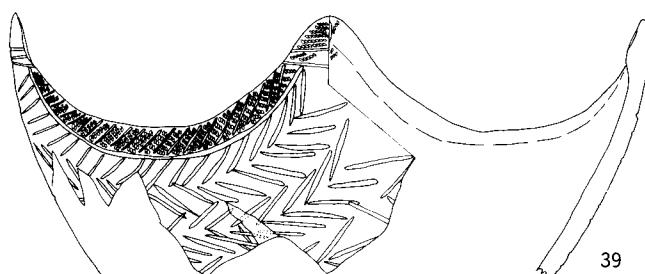
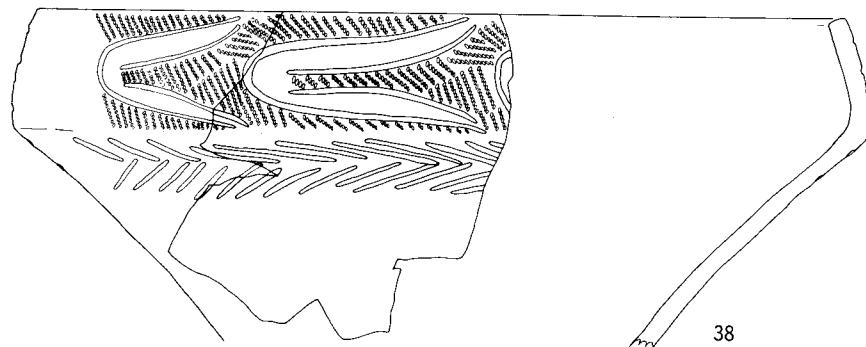


第15図 遺構出土の縄文土器(1)

の字状の無文部をもち、施文部は逆「ト」の字状で、先端部が開いている。胴部上半には矢羽状沈線が横走する。体部および内面が丁寧に磨いてあり、暗褐色を呈する。施文部には、部分的に赤色顔料の付着が観察される。加曾利B2式からB3式に関連するものと思われる。関東地方西部の同時期に見られるもので、肩部が算盤玉状に張った鉢形土器と同様の器形であり、「ト」の字形の磨消縄文も同時期に見られる²⁾。しかし、矢羽状沈線は、幅が広く、長さは短く、形状が明瞭であり、関東の加曾利B式に見られるような、しだいに退化して条線化する傾向とは異なっており、特異な土器といえる。

P 6 出土の縄文土器（第17図46～62、図版12）

46は沈線の区画文が施され、帯状に刺突が連続する。内面に沈線が横走する。47・48も沈線

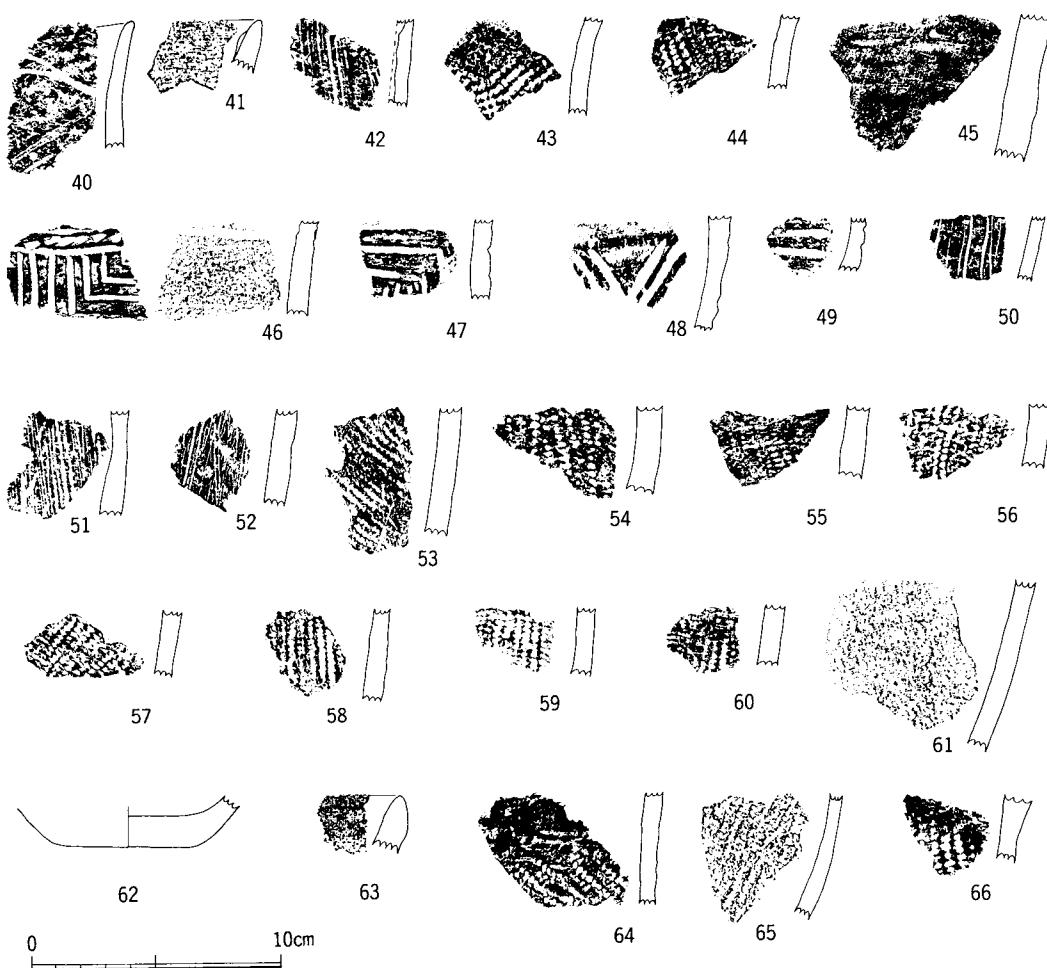


第16図 遺構出土の縄文土器(2)

の区画文である。48のものは斜行している。49は凹線が2本施されている。50~52は縦方向の条線文、53~60は縄文、61は無文である。62は無文の底部である。ほとんど後期のものであろう。

P 23出土の縄文土器（第16図39、図版13）

口径は推定で25cm、4つの山からなる波状口縁と思われる。口縁に沿って沈線が施され、さらに沈線によって細かく区画された部分に縄文が施文してある。波頂部は沈線が2~3本横に引かれている。口唇は尖り、内厚している。波頂部内面に刻みがあり、わずかに縄文がある。矢羽状沈線が湾曲した沈線にそって巡っており、2~3列確認される。



第17図 遺構出土の縄文土器(3)

P 25出土の縄文土器（第17図40～45、図版13）

40はゆるい波状口縁で条線が施されている。41は口縁の内側にやや瘤状に突起する部分がある。42は縦方向に条線がある。43・44は縄文のみの施文。45は器厚11mmの無文の土器である。

P 27出土の縄文土器（第17図63～66、図版13）

63は無文の口縁部。64～66は縄文のみの施文である。

第I群土器（第18図67～92、第19図100、図版14・15・16）

縄文早期の土器である。V層以下から出土している。復元可能な条痕文系の土器片が、VI層からまとまって出土した。次の4類に分類する。

1類 黒鉛入りの土器（第18図67、図版14）

67のみ1点出土した。磨耗していて文様の有無がはっきりしないが、拓影では山形の押型文のようにも見える。黒鉛入りの土器は飛驒地方を中心に出土しており、胎土に利用された黒鉛は吉城郡河合村で産出される。また、沢式土器と呼ばれる押型文土器には黒鉛入り土器が多く見られる。

2類 押型文土器（第18図68～73、図版14）

6点出土した。主としてVI層から出土している。68・69は山形文、70～72は楕円文である。楕円文は比較的粒が大きい。73はいわゆる連珠文であろう³⁾。

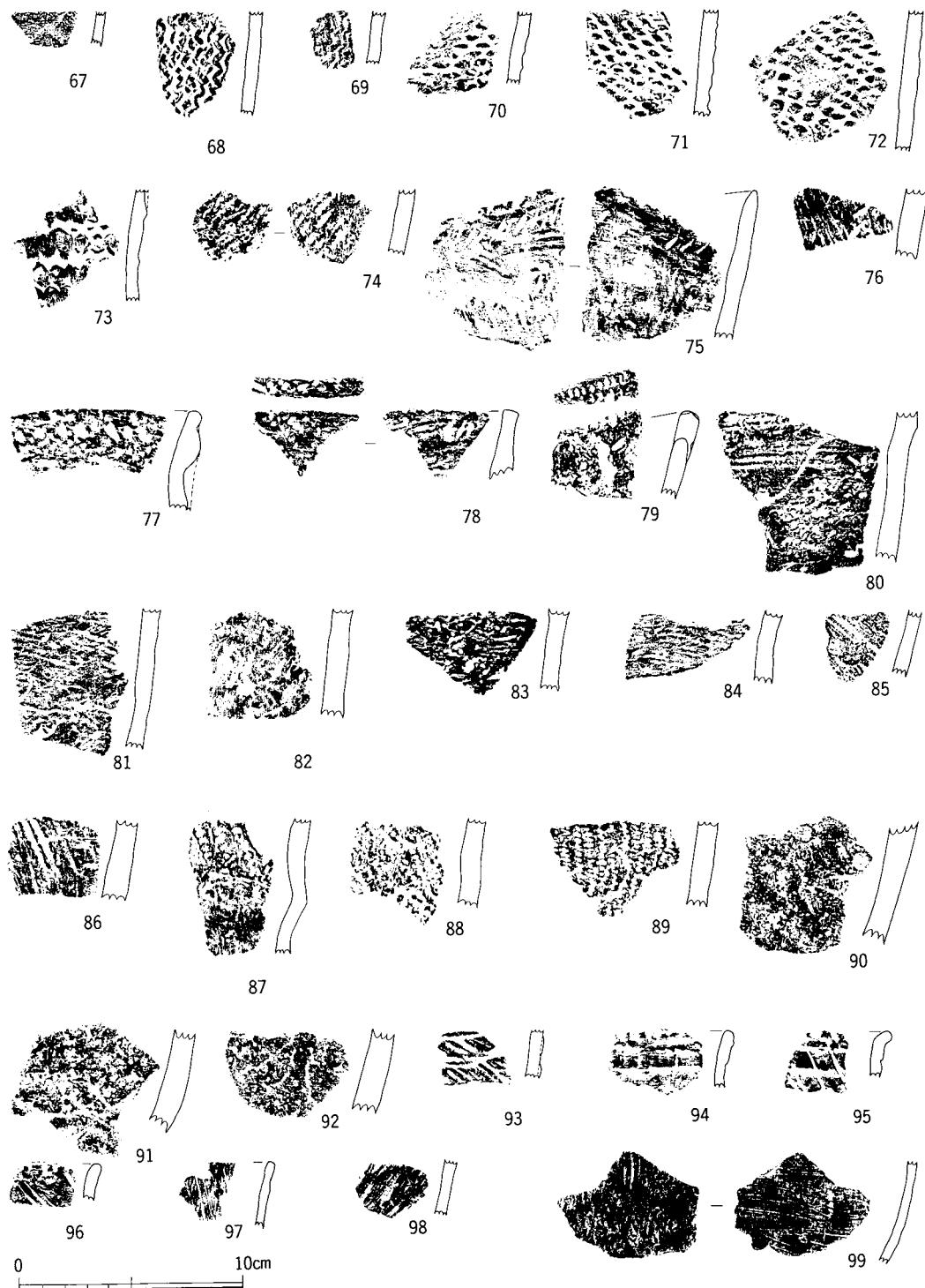
3類 表裏縄文土器（第18図74、図版16）

器厚7mm、色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色である。

4類 繊維を含む土器（第18図75～92、第19図100、図版15・16）

繊維を含み、茅山下層式、粕畠式等の条痕文系土器をはじめ、無文のものもある。

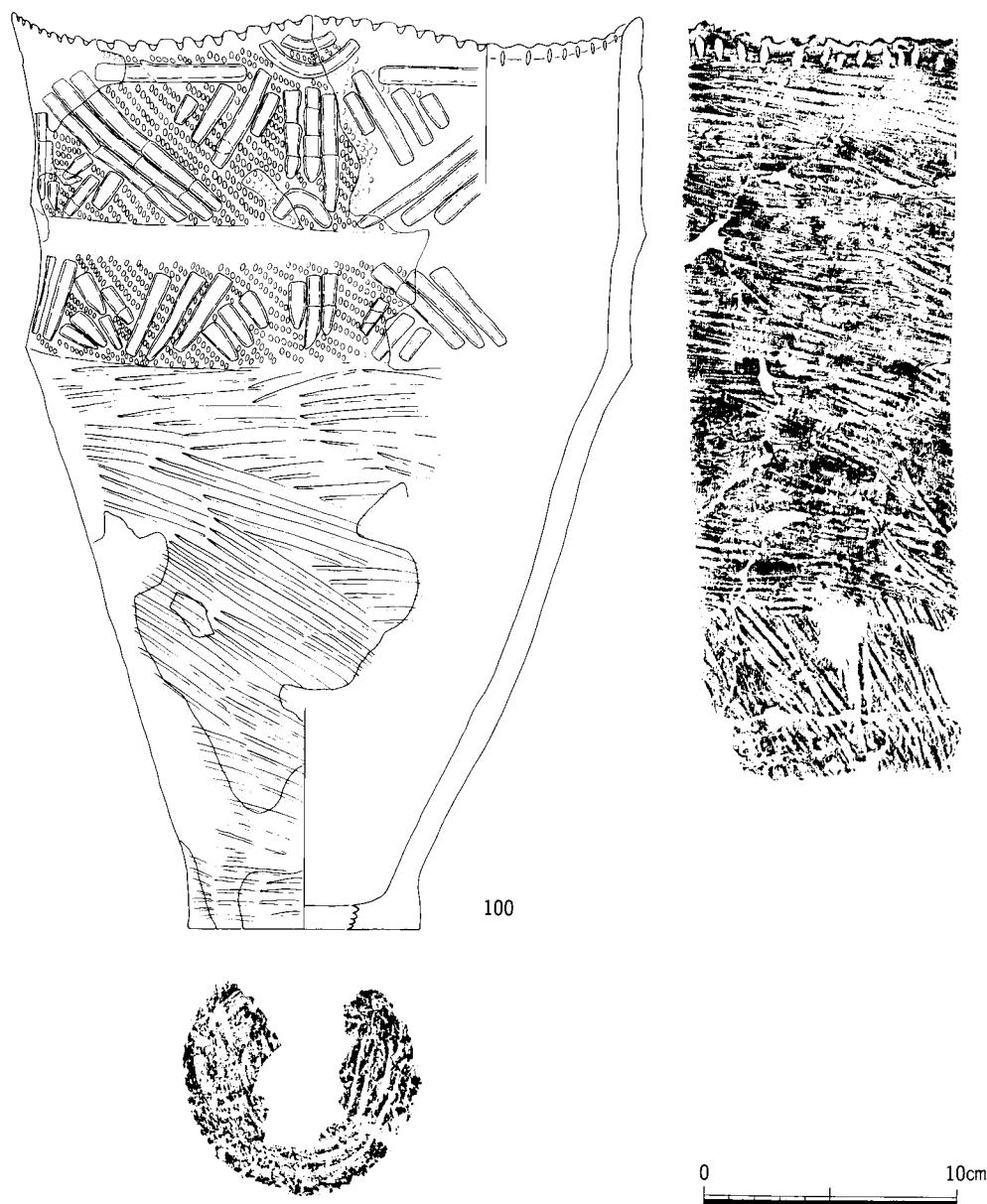
100はVI層より土器片が集中して見つかったもので（図版16）、器形が復元できるものである。口縁部は残存部が微妙な状態であるが、図では、ゆるい波状を呈する形にしてある。茅山下層式と考えられるが、同型式のものでは、4つの山形で、突起をもつものが見られる。平底で口縁部は直線的に立ち上がる。口唇には刻みあり、口縁内側には刺突が連続する。胴部にゆるい段が2段ある。胴の下半は貝殻条痕が施され、上半は縄文を地文とし、竹管状の工具による凹線文が展開する。山形の下では、円弧が二重に描かれ、口辺に沿って両側に1本ずつ、縦に3本引かれ、下にも円弧が描かれる。さらに、斜め方向に3本単位で押し引きし区画されている。



第18図 繩文土器(1) 第I群 第II群

区画のなかにも凹線文が見られる。上の段の直下は横方向になでられた無文部があり、その下には、口辺部と同様に3本単位の凹線文が展開する。内面にも条痕が施され、底部にも条痕が見られる。後述するように、飛驒地方の条痕文系の土器として貴重な資料になるものである。

75・76はゆるい波状口縁で、条痕が施され、爪形文が2列連続している。内面にも連續爪形



第19図 繩文土器(2) 第I群

文がある。粕畠式に比定される。

77は、口縁部刺突が連続している。78は口縁端部に繩文が押圧され、表は繩文、裏は条痕が施されている。79は波状口縁で、口縁端部に表裏両方向からの連続刺突がある。80～87は、ゆるい段を形成し、一部繩文が観察されるが、全面に条痕が施されている。

88・89は繩文のみである。90～92は器厚が8～11mmと厚手で、無文である。

第II群土器（第18図93～99、図版17）

木島系のいわゆるオセンベ土器である。早期末から前期初頭に位置付けられている⁴⁾。

93は、粘土紐を貼りつけた突帯に沈線が施されている。器厚は5～6mm、明褐色を呈する。塙屋式に相当するものかと思われる。

94～97は、器厚が3～4mm、色調は黒褐色。口縁はまっすぐに立ち上がるものとやや外反するものがある。口縁部は折り返してやや肥厚しており、斜めに細い沈線が施されている。木島式に相当するものと思われる。

98・99は、外面あるいは、内外面に条線が施されている。器厚は4mmである。指痕と思われる部分もある。

第III群土器（第20図101～141、図版17・18・19）

繩文中期と思われる土器。少量であるが前葉から中葉まで各時期のものがある。時期および施文から次の5類に分類する。

1類 西日本系の前葉の土器（第20図101～106、図版17）

口縁の内面にも繩文があり、連続爪形文を特徴とする。101は波状口縁の山形の部分で、波頂部は平坦である。繩文を地文とし、細い爪形の隆帯が2本曲線を描いている。内面は幅約1cmで段があり繩文が施されている。102は口縁に沿って爪形文があり、口縁端部は内面に面取りがなされ繩文が施されている。103・104は爪形の隆帯が口縁に沿って横走する。105は屈曲部に爪形文が施される。106は内湾する口縁で外面および内面口縁下に繩文が施される。

2類 北陸系の前葉の土器（第20図107～115、図版17・18）

半隆起線文を特徴とし新保・新崎式と思われるものである。107～109は多条の半隆起線文が横走する。110～112は半隆起線により区画され、区画内には沈線が縦横に充填されている。113～115は木目状撚糸文で、この類に伴うものと思われる。115は刺突文が見られる。

3類 中葉の土器（第20図116～123、図版18）

隆起線や沈線による施文のもの。116～119は沈線を伴う隆起線文のものである。116は隆起線による区画文に、連続する刺突が施されている。117・118は横方向に、119は縦方向に施文されている。121は沈線を伴わない。122・123は縦方向の沈線文である。

4類 後葉の土器（第20図124～136、図版18・19）

いわゆる綾杉文や条線を施したもの。124～126は綾杉文で、124は細い沈線、125・126は太い沈線で描かれている。127～129は堅緻で赤褐色を呈し、面取りされた口縁部を持つ。130～136は赤褐色あるいは黄褐色で、風化が激しい。

5類 無文の土器（第20図137～141）図版19

中期と思われるが時期不明の無文土器である。137・138は器厚13mmと厚手のもので、139はゆるい波状を呈しているようである。

第IV群土器（第21図142～188、図版19・20・21）

後期の土器。遺構外出土のものは、いずれも小破片ばかりである。わずかずつではあるが、前葉から後葉のものまである。型式・施文等から次の5類に分類する。

1類 宮田式土器（第21図142～154、図版19）

微隆起線文を特徴とするもので、増子康真氏が提唱する宮田式の2類にあたる。文様は縦横に展開し、曲線的な部分もある。下方に縄文を伴う。

2類 磨消縄文を施すもの（第21図155・156、図版20）

屈曲する口縁部で、やや肥厚している。いわゆる縁帶文系の土器である。

3類 沈線文を施すもの（第21図157～177、図版20）

157は内屈した口縁で端部は面取りしてある。沈線間に連続する刻み目がある。159は口縁内面に沈線があり、口唇部内面に連続する刻み目が施されている。160は口縁部で縦方向に沈線が施されている。161は太い沈線と細い沈線で区画されている。162は2本の隆帯が横走し、縄文が押捺されている。164は口辺部に曲線と直線の沈線を組み合わせている。166～168は、斜めに数本の沈線が施されている。173～177は刺突を伴うものである。174～177はいずれも沈線内に連続刺突文が施されている。

4類 凹線文系の土器（第21図178・179、図版21）

178は口縁部で、凹線間に貝殻の押圧痕があり、宮滝式をはじめとする後期後葉の土器に見られる特徴である。179は口縁端部にも凹線が施されている。

5類 その他の土器（第21図180～188、図版21）

181・182は口縁部で口辺部は無文になっている。183は表面は縄文で、口縁内面に2本の沈線が施されている。184は口縁部で羽状縄文が施されている。185は丁寧に磨かれた黒褐色の土器で、部位は不明であるが、注口の一部と推定した。188は口辺部に沈線と刻み目が組み合わせてあり、晚期の土器の可能性もある。

第V群土器（第22図189～217、図版21・22）

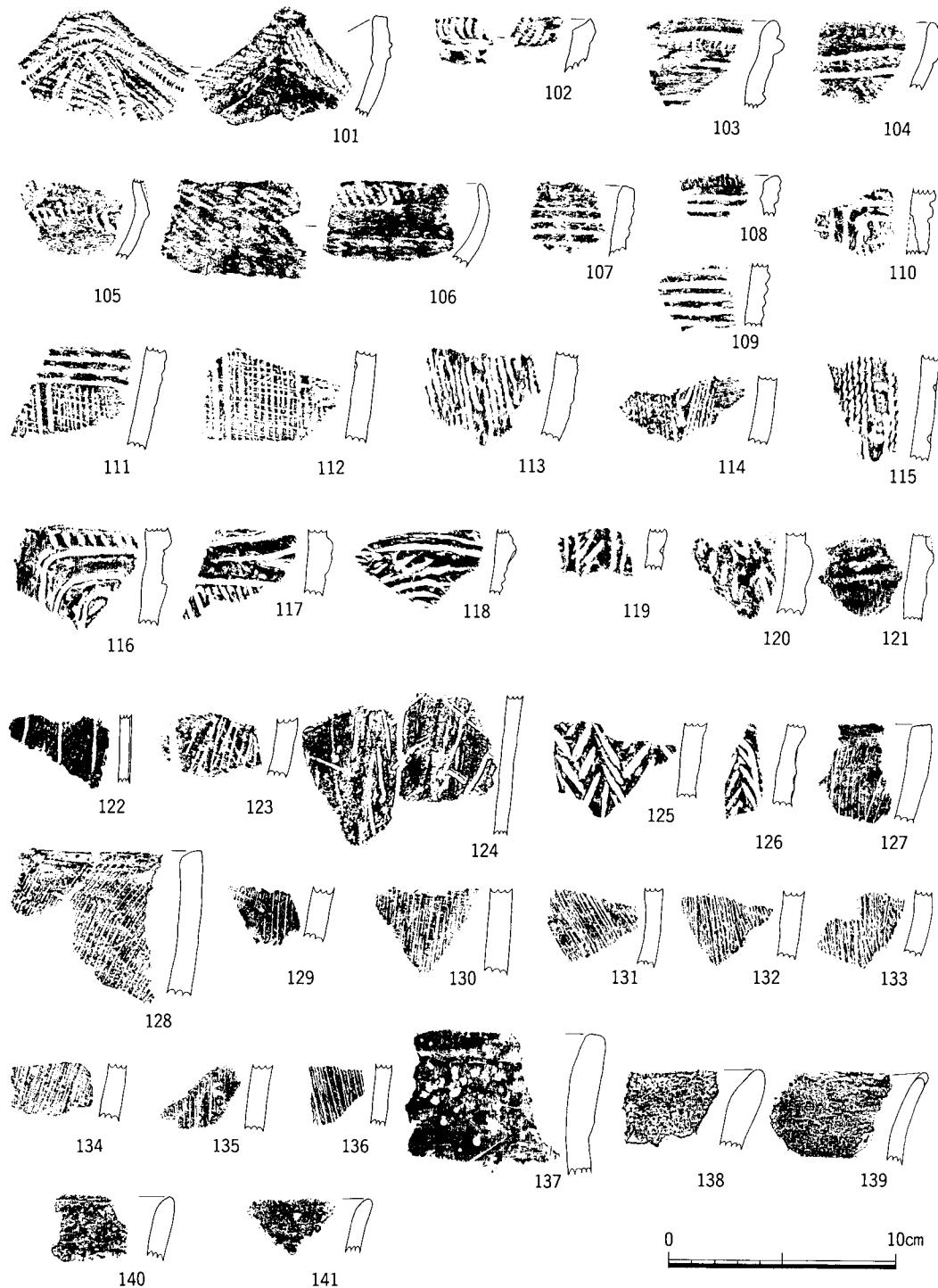
縄文のみのもの。比較的厚手のものと薄手のものがあり、中期から後期のものであろう。

第VI群土器（第22図218～222、図版22）

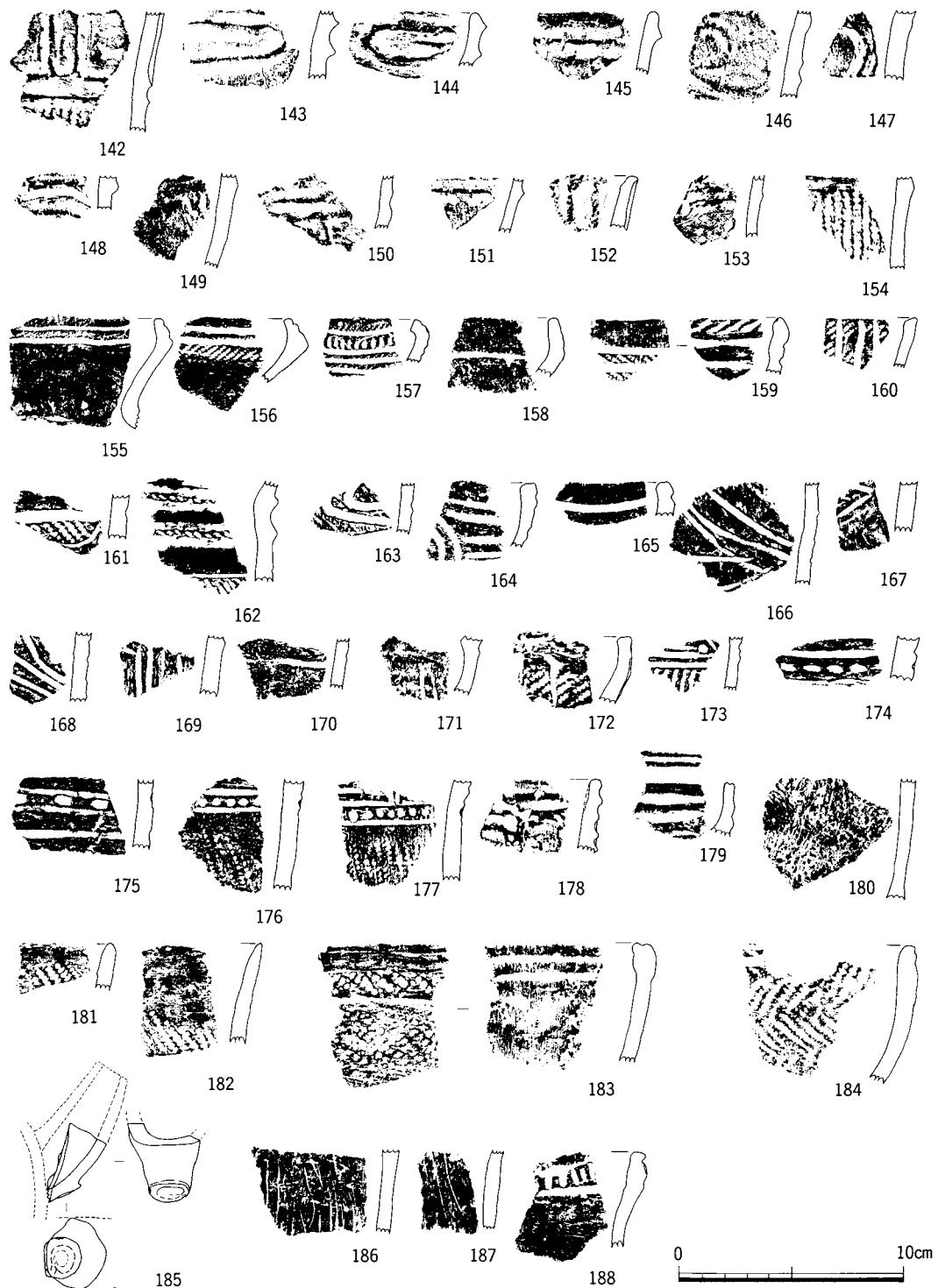
時期・型式等不明の底部。218は底部よりまっすぐ外に開き、体部下端まで縄文が施されている。219・221・222は底部よりわずかに内曲するカーブを描いて立ち上がる。219～222はいわゆる網代底。網代の編み方を観察すると、219・220は「2本越え、2本潜り、1本送り」、221は不明、222は「1本越え、1本潜り、1本送り」である。

(註)

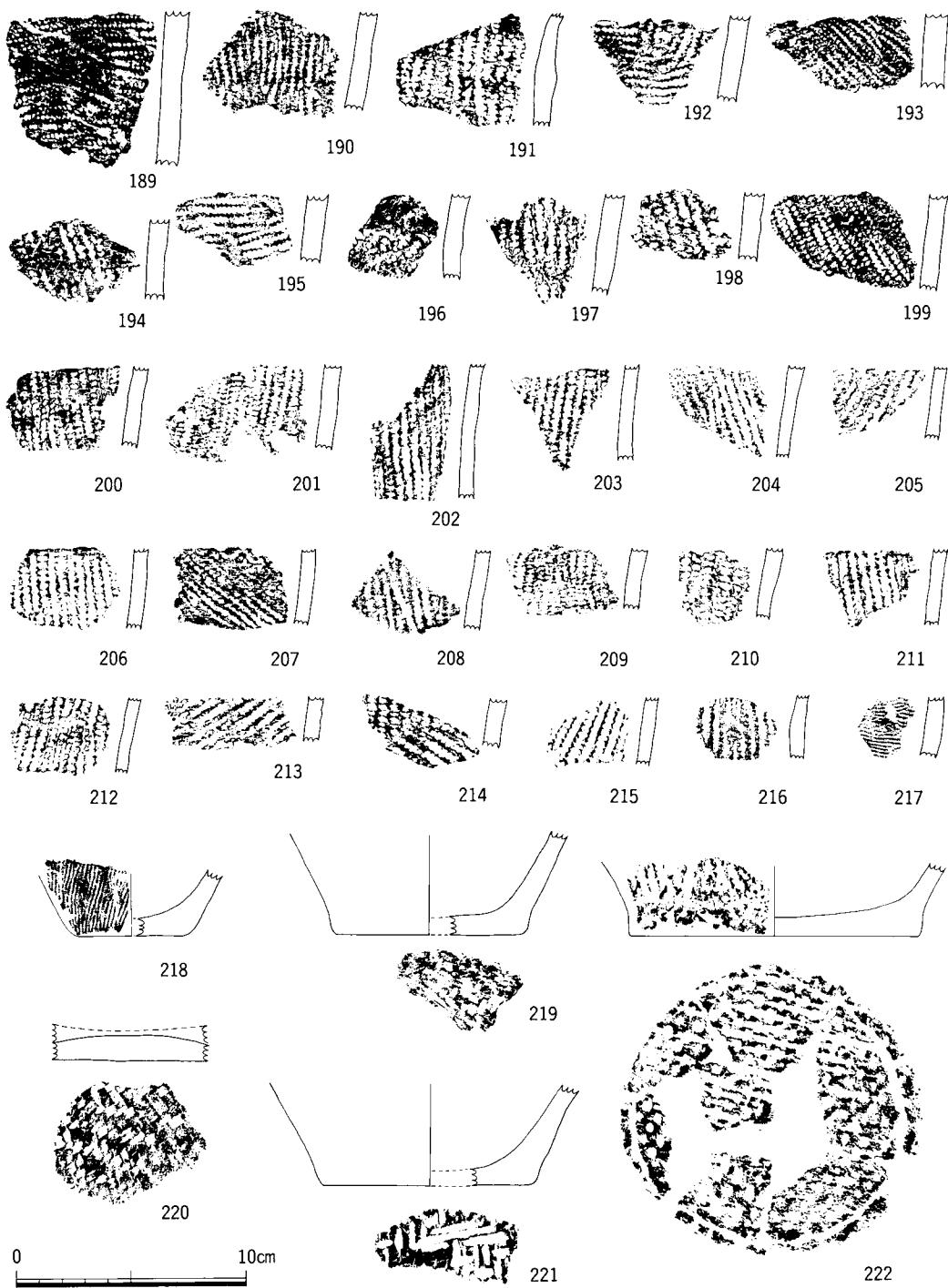
- 1) 文献 増子（1979）
- 2) 文献 大塚（1986）
- 3) 文献 国府町教育委員会（1988）
- 4) 文献 吉田（1984）



第20図 縄文土器(3) 第III群



第21図 繩文土器(4) 第IV群



第22図 繩文土器(5) 第V群 第VI群

第2節 石 器

土器と同様に各包含層より出土している。石鏃の一部に、時期的に特徴的な器形のものも見られる。出土した石器および石製品は約140点であり、石鏃、石錐、ピエス・エスキーユ、スクレイパー、打製石斧、礫石錐、磨石等が出土している。

剥片石器および石核を概観すると、やはり下呂石が多く、自然面を有するものが少ないが、自然面の見られるものを観察すると、転石に見られるような細かなクラックはなく、露頭等から直接採取してきたもののように思われる。

以下、器種ごとに記述する¹⁾。

石鏃（第23図1～15、図版23）

25点出土した。いわゆる下呂石製が24点、チャート製が1点である。分類に関しては、基部の形態に着目して、下記のように分類した。

I類 基部に抉りの入るもの。次のa～eに細分される。

- a 丸みを帯びた深い抉り込みの入るもの。
- b 「く」の字状の抉り込みの入るもの。
- c 半円形のわずかな抉り込みが入るもの。
- d 凹状のわずかな抉り込みが入るもの。
- e 深く鋭角的な抉り込みが入るもの。

II類 いわゆる平基鏃であり、基部が直線状をなすもの。

III類 いわゆる円基鏃であり、基部側が丸みを帶びて突出するもの。

IV類 いわゆる有茎鏃であり、基部に茎をもつもの。

I a類（第23図1、図版23）

1点のみ出土。チャート製のいわゆる鍬形鏃である。

I b類（第23図2～5、図版23）

5点出土。すべて安山岩（下呂石）製である。

I c類（第23図6～9、図版23）

5点出土。すべて安山岩（下呂石）製である。いわゆる鋸歯状剝離をもつものもある。

I d類（第23図10～12、図版23）

8点出土。すべて安山岩（下呂石）製である。長大なものや、小形のものがある。

I e 類（第23図13、図版23）

安山岩（下呂石）製のものが1点出土した。

II 類（第23図14、図版23）

2点出土。ともに安山岩（下呂石）製である。

III 類（図版23）

2点出土。ともに安山岩（下呂石）製である。

IV 類（第23図15、図版23）

一部欠損しているが、安山岩（下呂石）製のものが1点出土している。

石錐（第23図16～18、図版23）

8点出土した。下呂石製が6点、チャート製が2点である。分類については、下記のように分類した。

I 類 剥片の一端に長い尖頭部を作り出し尖頭部と基部（=つまみ部）の機能の分化が明確なもの。

II a 類 長い棒状を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもので、両端に尖頭部を持つもの。

II b 類 基部と尖頭部の区分が不明瞭なもので、尖頭部が一端にあるもの。

III 類 剥片の一部に尖頭部を作り出したもの。

I 類（第23図16、図版23）

2点出土した。ともに下呂石製である。

II a 類（第23図17、図版23）

1点出土した。白色を呈するチャート製である。

II b 類

2点出土した。すべて下呂石製である。

III 類（第23図18）

1点出土した。乳白色を呈するチャート製である。全面に調整剝離が施され、剥片の素材面はほとんど残らない。上下両端の刃部は磨耗している。

ピエス・エスキュー（第23図19～21）

23点出土した。下呂石製が22点、チャート製が1点である。19はチャート製で、素材剥片は転石を利用したと思われ、節理が発達している。

削器（第24図22～24）

6点出土した。すべて下呂石製である。22は、横長剥片を用いて、その端部に腹面から背面にかけて刃をつくり出している。腹面上側縁にみえる自然面は、石核の底面であると思われる。23は縦長剥片を用いて、側縁から端部にかけて丸く刃部をつけている。刃部は腹面から背面にかけて刃をつくり出している。右側縁は剥片を取り出した割れ面の鋭利な部分をそのまま刃として利用している。24は、剥片の両側縁に、背面側から調整を加えて刃部を形成している。腹面端部にみられる自然面は、石核の底面である。

搔器（第24図25・26）

2点出土した。下呂石製が1点、黒曜石製が1点である。26は下呂石製で、節理と思われる平面的な剥片に側縁から端部にかけて丸く刃部をつくり出している。

U F（第24図27・28）

15点出土した。素材の鋭い縁辺に残された剝離痕が1mm以下で、刃こぼれ状を呈するものをU Fとした。すべて、下呂石製である。

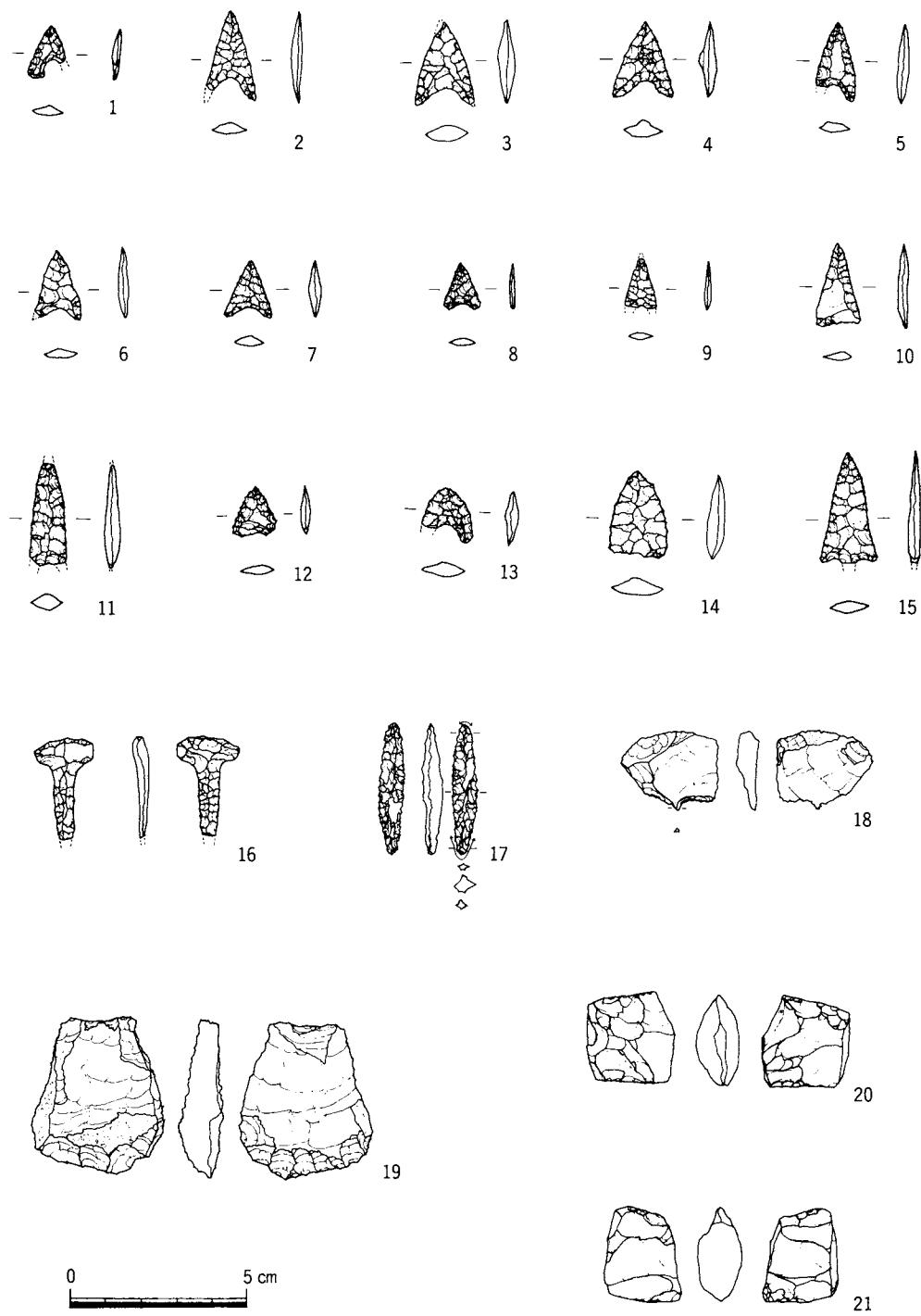
R F（第24図29・30）

8点出土した。剥片に二次加工を施すが、刃部を形成していないものをR Fとした。すべて下呂石製である。

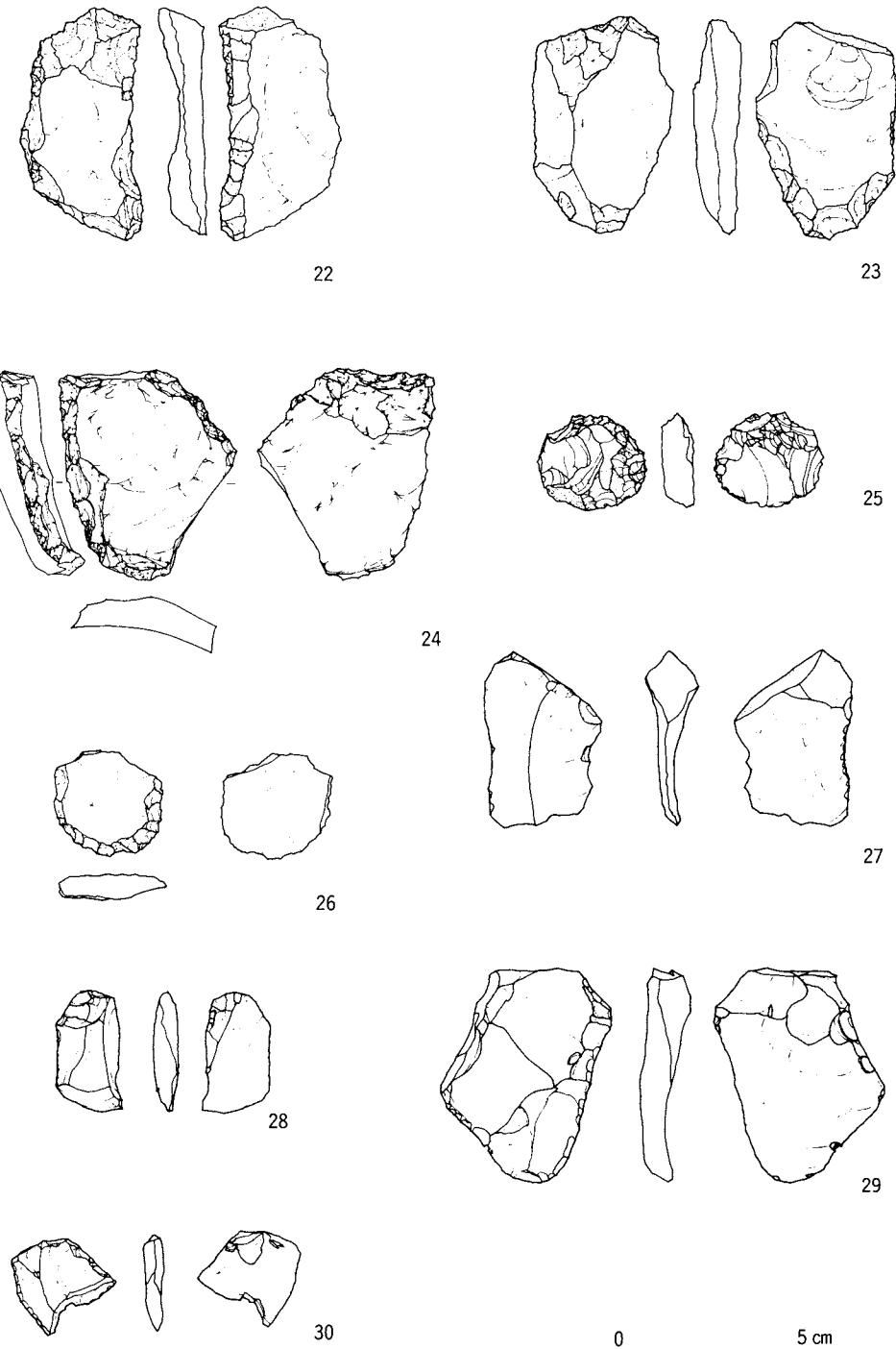
石核（第25図31～35）

すべて下呂石製で、様々なタイプの剥片剝離が行われている。1・2は、打面を一面に設定し、剝離作業が、一面の作業面においてのみ行われている。このタイプの石核は5点見られる。概して打角は大きく、垂直に近い。打面は1枚の折れ面、または剝離面で、打面調整はおこなわない。1は、下端部に潰れが見られる。打面の作業面以外はすべて折れ面である。

3は、打面は一面に設定し、表裏両面で剝離作業を行うタイプで3点ある。残核は舟底形を



第23図 石器(1) 石鏃 ピエス・エスキュー



第24図 石器(2) 削器 搔器 U F R F

呈する。打角は垂直に近く、打面は一枚の剥離面で、打面調整は行われない。3の下端部は、剥離作業以前の折れ面であるが、他の2点の底面も折れ面か剥離面である。

4は、作業面と打角を入れ替えて剥離していくタイプの石核で、4点見られる。打角は小さく、偏平なレンズ状の残核が残される。

5は、打面を何度も転位し、サイコロ状を呈する残核で、5点ある。打角も大きいものから小さいものまで様々である。

打製石斧（第26図36～44、図版23）

59点出土した。いわゆる短冊形が多く（36～39・44）、少しであるが、撥形としてもよいものもある（40～43）。濃飛流紋岩、凝灰岩、砂岩製のものがある。

礫石錐（第27図45～50、図版24）

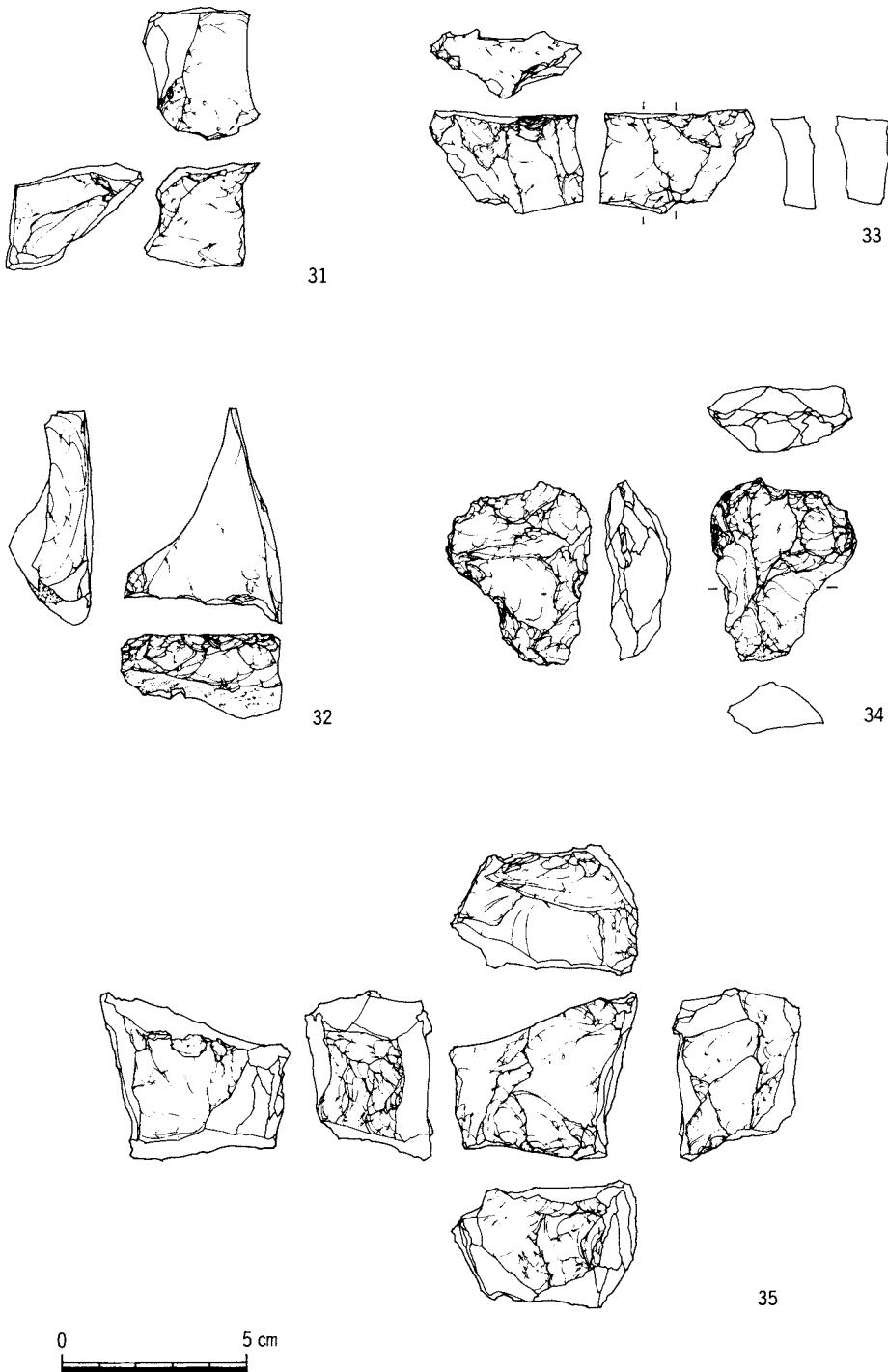
6点出土した。円礫の長軸両端に数回の剥離を加え、紐かかり部を作りだしている。凝灰岩、砂岩、石英安山岩製のものがある。

磨石・凹石・敲石類（第27図51～57、図版24）

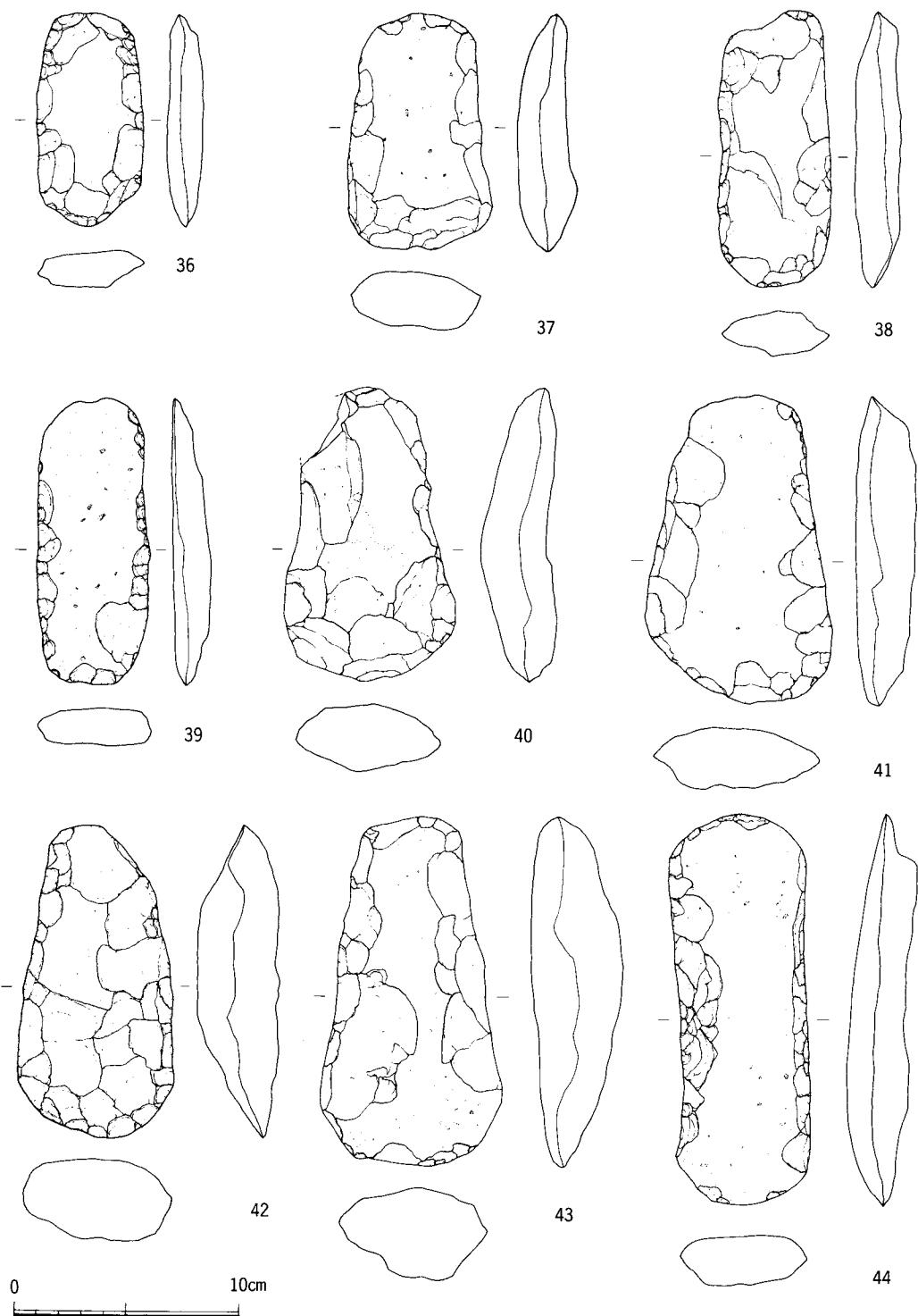
7点出土した。は敲石と思われる。石材としては、濃飛流紋岩、安山岩、砂岩製である。

（註）

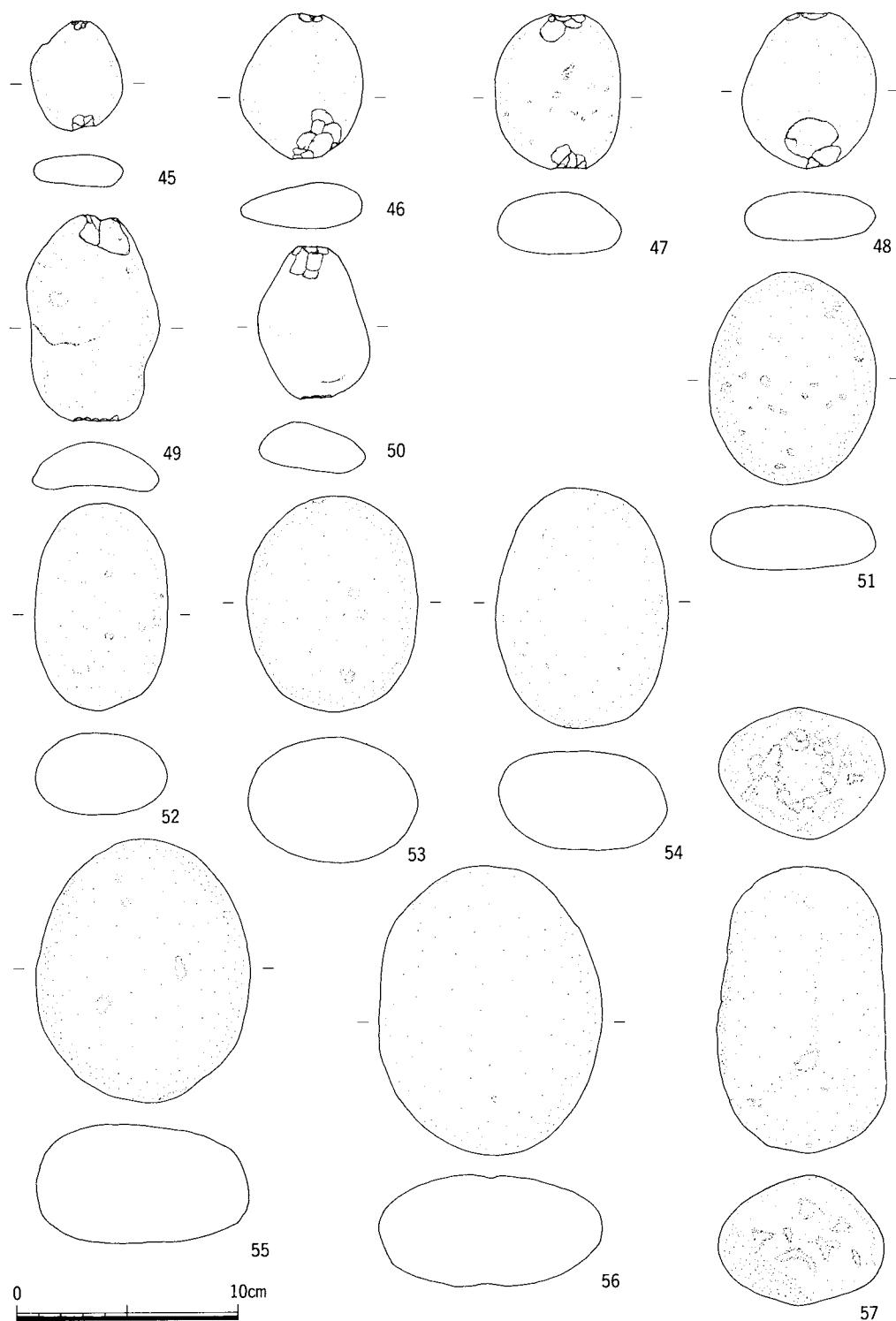
1) 石器の分類に関しては、佐野康雄「第5節石器」岐阜県教育委員会『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』（1991）を参照した。



第25図 石器(3) 石核



第26図 石器(4) 打製石斧



第27図 石器(5) 石錐 磨石・凹石・敲石類

第5章 考 察

第1節 藤原遺跡のまとめ

今回の発掘調査地点は、道路幅内ののみの調査という制約もあって、縄文時代の集落遺跡の中心からはずれた所であった。しかし、注目すべき遺構の検出や、貴重な遺物の出土もあった。その内容は前章までで述べた通りであるが、全体を整理してまとめとしたい。

遺跡の立地は、飛驒川左岸の段丘であるが、南部に遺跡の広がりがあった。平面掘りした地点の東側、つまりJR高山本線を越えた山側に遺跡がつづいていたと思われる。

遺構としては、時期不明の溝状遺構、縄文後期と推定されるピット・土壙群、早期の可能性がある配石遺構が検出された。配石遺構は、「焼礫集石遺構」の一種とも考えられるが、さらに検討して行く必要がある。

縄文土器としては、まず早期のものがある。黒鉛入り土器や押型文土器が少量出土しているが、やはり、形状が明らかになった茅山下層式の深鉢が注目される。後述するように、飛驒地方で復元された早期条痕文系土器としては3例目であり、本型式のものとなると、県内あるいは、周辺地域を含めても、非常に稀な例といえる。

前期から中期にかけての土器は少量見つかっているが、次に注目すべき資料は、後期のものであろう。前葉の「宮田式」土器を確認し、さらに、器形が推定できる加曾利B式並行の土器が出土した。後者は、関東の土器の要素がストレートに入ったものではなく、特異なものである。

石器類は、石鎌、石錐、削器、搔器、ピエス・エスキーユ、礫石錐、打製石斧、磨石・凹石類などが出土している。剝片石器はいわゆる下呂石の比率が高いが、黒曜石製のものも一部見られる。

第2節 久々野町内の縄文遺跡

久々野町内の縄文遺跡は、第1章で述べたように、14か所確認されているが、実際には、未発見のもの、滅失されたものなどが予想される。縄文早期から晩期までの各時期の遺物が出土している。石器に関しては、堂之上遺跡の石棒など、注目されるものもあるが、ここでは、編年にテーマを絞って、飛驒川流域の一地域である久々野町内の縄文土器について概観する。

早期

確実に草創期に遡るものは見つかっていない。押型文土器の段階のものが、堂之上遺跡や藤

原遺跡で見つかっている。藤原遺跡の黒鉛入り土器（第18図67）は沢式土器の可能性がある。押型文に続く早期末葉の条痕文系の土器としては、藤原遺跡の第I群土器（第18図・第19図）に見られるように、典型的な茅山下層式から粕畠式のものが見られる。

前期

早期末からの「木島系土器群」の類が藤原遺跡で出土しているが（第18図93～99）、それにつづく神ノ木式が堂之上遺跡で見つかっている。堂之上遺跡は前期中葉から中期末までの各時期の住居跡を検出しており、飛驒地方の縄文土器の編年を考える上でいくつかポイントになる時期の資料を提供している。その18号住居跡では前期のまとまった資料が出土している。調査概報によると、「5種類に分類されており、「信州を中心とする神ノ木式、折り返し口縁と爪形文を特徴とする東海地方の清水ノ上II式、折り返し口縁と貝殻腹縁文が施される土器群、斜行縄文を主とする縄文土器群、薄手無文あるいは、わずかに爪形文の施される土器群」からなっている。この共伴関係より、清水ノ上II式と神ノ木式の並行関係が確認された。

黒浜式の完形土器が8号住居跡から出土している。北白川下層II式と諸磯a式が共に比較的多く出土している。

前期末では、諸磯c式は少量で他に十三菩提式、鍋屋町式が僅かに見られる。

中期

堂之上遺跡を中心に中期の様相を見ると、中期初頭は、鷹島式・船元式の西日本系の土器に、北陸系の新保・新崎式が比較的多く出土している。西日本系と北陸系の土器の混在に関しては、この時期の飛驒地方の特色でもある。藤原遺跡の南西約5kmのやはり飛驒川左岸に位置する益田郡小坂町門坂シズマ遺跡でも同時期の土器に関しては、同様の傾向が見られた¹⁾。

新道式・勝坂式、古府式は少量出土している。堂之上遺跡では、井戸尻III式並行と思われる住居跡がいくつかあり、図版25の3は、36号住居跡出土のものである。

渚遺跡では、加曾利E式土器が見つかっている。いわゆる手焙り形のものである。

堂之上遺跡では、中期後半の土器は大変多い。里木II式・咲畠式が出土している。曾利III～IV式の資料が多い。少量の加曾利E3式、串田新式がみられる。中期末は、葉脈状文をもつ北陸系の資料が多い。図版25の1は6号住居跡出土の釣り手土器、図版26の1は14号住居跡の埋甕、図版25の4は26号住居跡出土のもので、いずれも曾利III式並行と考えられている。

後・晩期

藤原遺跡では、少量ながら、前葉から後葉にかけての資料が見られる。いわゆる宮田式をはじめ、加曾利B式とのつながりが考えられる土器（第16図38）が特徴的である。加曾利B1・

2式段階までは、比較的関東系の土器が見られるが、加曾利B3式段階になると西日本系の縁帶文系の土器が優勢となる。ごくわずかであるが、後葉の凹線文系の土器が見られる。やはり後期の遺跡数の減少に伴う資料数の不足は否めない。

晩期のまとまった資料は確認されていない。

以上、浅薄であるが、久々野町内の縄文土器を概観してみた。基本的には飛驒地方各地の縄文土器のあり方と同じである。しかし、当地は、東西南北の文化交流の接点とも言うべき地点に位置するため、前期の神ノ木式に見られるように、縄文土器の編年を考える上で貴重な資料を多く提供している。今後、精緻な研究が積み重ねられて行くことを期待したい。

第3節 飛驒における早期条痕文系土器について

藤原遺跡においては、器形の復元できた茅山下層式をはじめ粕畠式等の、いわゆる条痕文系の土器が見つかった。

縄文早期後葉のいわゆる条痕文系の土器は、まず、関東地方の貝塚の調査によって編年の枠組みが明らかにされて来た。つまり、絡条体圧痕文を特徴とする子母口式、尖底で細隆起線文や太形の沈線文が描かれる野島式、平底化し、二段の屈曲のある器形で、細い竹管文が多用される鶴ヶ島台式、段が緩やかになり、凹線や幾何学的な構図を表す刺突文を特徴とする茅山下層式、文様が乏しく、わずかに隆線や粗い斜縄文が施された茅山上層式への変化である。これらの型式は、型式学的に連続性をもつものであり、また、関東を中心に東北から近畿さらには広島県のあたりまで分布する、斉一性の強い型式群である。この茅山上層式に並行して、東海地方の粕畠式があり、これ以降、上ノ山式、入海式、天神山式（石山）と続く東海地方の条痕文系土器は分布の中心が東海地方にある。東海系の条痕文土器は小平底あるいは尖底となり、胎土の纖維量は漸次減って行く。

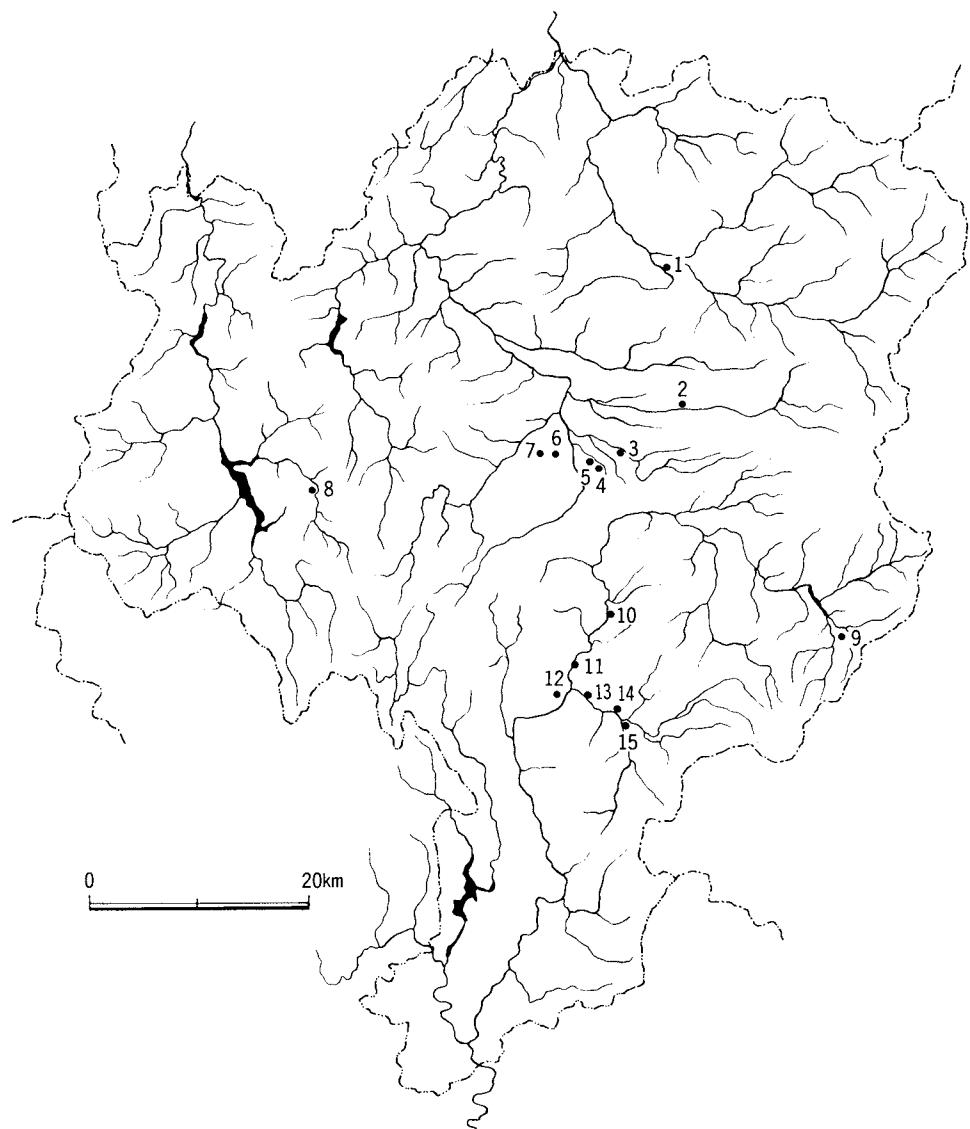
この時期の土器としては、飛驒では、上ノ山式の復元土器もあるが、その様相はいまだ十分明らかにされていない。ここでは、資料の集成を試みたい。

1 田影遺跡（吉城郡上宝村本郷田影）

茅山式類似土器片として報告されている資料がある。文様の施文具およびモチーフ等から鶴ヶ島台式類似といえる。

2 根方岩陰遺跡（大野郡丹生川村根方馬ツギ）

小八賀川の右岸に位置し、石灰岩の断崖基部に南面して開いた岩陰である。昭和38年と昭和



第28図 早期条痕文系土器出土遺跡

60年に発掘調査がなされている。

昭和38年の発掘調査によると、下層下部より、茅山式類似土器、粕畠式、上ノ山式が出土し、中層下部から入海I式、入海II式、石山式が出土している¹⁾。

3 白元遺跡（高山市漆垣内町山腰）

貝殻縁の圧痕が水平に連続し内面に貝殻条痕が見られる土器などがあり、入海式段階の土器が出土している。

4 向畠遺跡（高山市江名子町向畠）

入海式から石山式段階の土器が出土している。

5 ひじ山遺跡（高山市江名子町諏訪ヶ洞）

第二群の纖維土器A式とされるものは、粕畠式の特徴を示している。

6 石ヶ谷遺跡（高山市西之一色町石ヶ谷）

入海式から石山式段階の土器が出土している。

7 松原遺跡（高山市上岡本町松原）

第一類とされた土器は、粕畠式の部類に入ると考えられている。

8 桐ヶ洞遺跡（大野郡荘川村六厩桐ヶ洞）

『岐阜県史』によると、粕畠式が出土している。

9 下幕岩岩陰遺跡（大野郡高根村留ノ原）

上ノ山式の復元土器が見つかっている。文献（高山考古学研究会1984）によると、「資料は約3分の1を欠失するが、口縁から底部までを備えた17片の破片からなっており、石膏修復なくしてその全形を知ることが出来た。高さ37cm、口径27cmの円錐形をなす深鉢土器で、底部は径4cmの乳頭状に突起する。口縁部に一条の、上下より交互に押された突帯をもち、口縁内側には貝殻縁による引きする様な刺突が並んでいる。外面全体にわたって斜位の貝殻条痕文が、内面には横位の条痕文がみられ、胎土に纖維を含んでいる。焼成は極めてよく、堅緻で、黄味を帯びる褐色を呈している。器厚は底部を除いて7~9mmの間にある。口縁に近い3カ所に、ひび割れ補修と思われる孔が1対ずつ穿たれている。土器表面は永く地表に露呈していたらしく、部分的に苔の付着がみられた²⁾。

10 藤原遺跡（大野郡久々野町長淀）

第4章で述べたように、茅山下層式、粕畠式等の条痕文系の土器がまとまって出土した。

11 門坂シズマ遺跡（益田郡小坂町門坂）

平成3年に発掘調査され、縄文中期前葉を中心とした遺跡であるが、上ノ山式と思われる土器片が1点出土している。

12 橋場遺跡（益田郡小坂町大島巾上）

押型文土器が主として出土しているが、内外両面に条痕を施し、さらに爪形文が認められ、波状口縁の口唇上にも爪形が施文されている粕畠式と思われる土器が出土している。

13 味屋遺跡（益田郡小坂町長瀬味屋）

縄文前期を主体とした遺跡であるが、纖維を含み爪形文が口縁内外に見られる粕畠式土器が出土している。

14 深作裏垣内遺跡（益田郡小坂町赤沼田深作）

石山式と思われる土器片が出土している。

15 南垣内遺跡（益田郡小坂町落合南垣内）

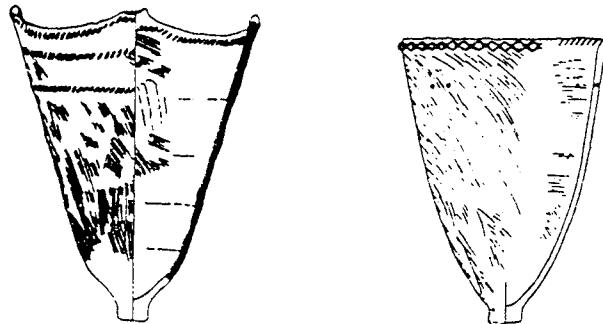
濁河川と小黒川の合流地点にあり、二段の段丘に位置している。第二段丘上より、粕畠式、上ノ山式、入海式土器等に相当する土器が出土している。粕畠式と思われるものは、纖維を含み、条痕を施し、爪形文を有する（第29図4、5、15）。

上ノ山式土器は、口唇部を指頭で押圧し、小波状縁を呈し、その下の凸帯を上下交互より押さえている（第29図7、8、9）。

入海式もいくつかある。第29図14は、口唇部に貝によって内外面より交互に刻み目を付け、口縁部の凸帯の上にも貝によって縦に刻み目を入れている。11も凸帯の上に貝による刻み目が見られ、内外面に条痕が認められる。12、13、16、17等は、入海II式に相当し、凸帯が平たくなっている。

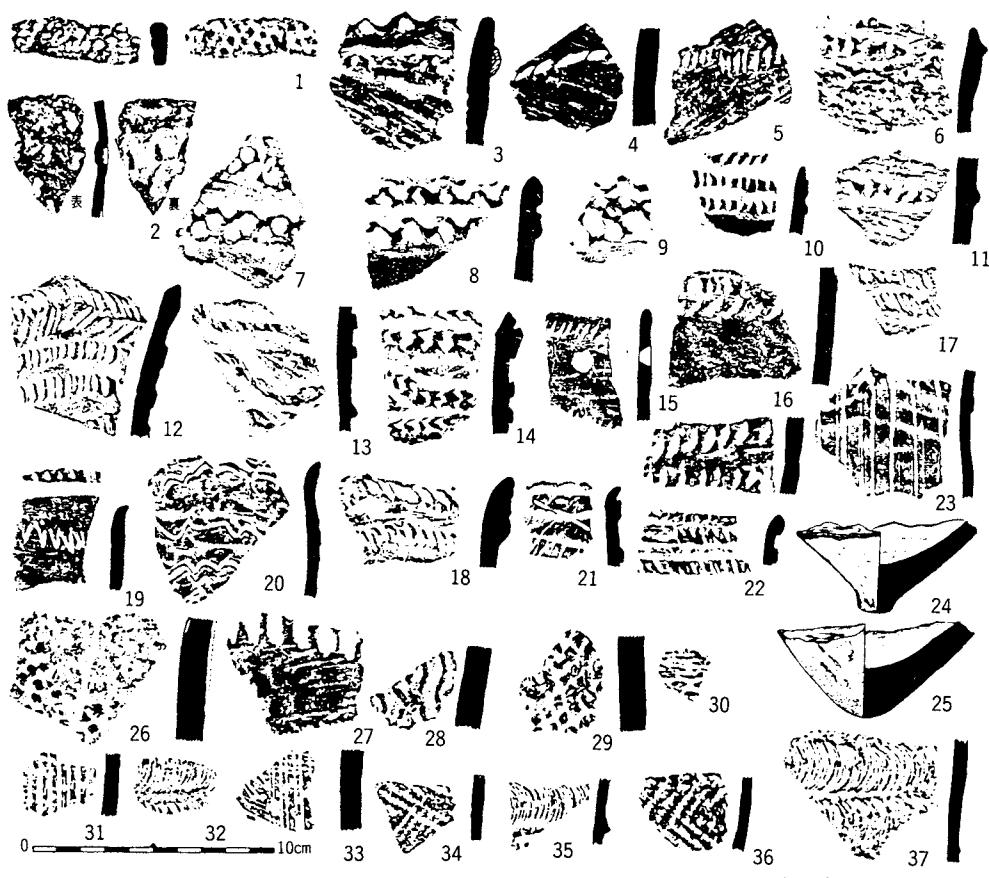
（註）

1) 2) 掲載した土器実測図は、岐阜県博物館「特別展 飛驒のあけばの」のシンポジウム「飛驒からみた石器と土器の交流」資料より作成。



貝殼条痕文土器／丹生川村根方炭陰

貝殼条痕文土器／高根村下幕岩岩陰



南垣内遺跡出土土器

第29図 参考土器 早期条痕文系土器

[参考文献]

- 赤木清 1936a 「江名子ひじ山の石器時代遺跡 その一」『ひだびと』第四年第四号
 1936b 「江名子ひじ山の石器時代遺跡 その二」『ひだびと』第四年第五号
 1936c 「飛驒の貝殻紋ある土器」『ひだびと』第四年第七号
 1937 「江名子ひじ山の発掘報告」『ひだびと』第五年第一号
- 安孫子昭二 1982 「縄文後期の土器 関東・中部地方」『縄文土器大成』3 後期
- 江馬ミサオ 1937 「渚出土縄文土器」『ひだびと』第五年第十号
- 大江 命 1965 『飛驒の考古学 I』
- 大江 命・下形 武 1958 『上宝村の先史時代』
- 大塚達朗 1986 「型式学的方法－加曾利B式土器」『季刊考古学』17
- 岡本 勇 1982 「縄文早・前期の土器 関東・中部地方」『縄文土器大成』1 早・前期
- 小坂町教育委員会 1978 『水口遺跡・ソラ遺跡』
 1984 『南垣内遺跡 I』
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1980 『角川日本地名大辞典』21岐阜県
- 鎌木義昌編 1965 『日本の考古学』II
- 川上寒朗 1935 「貝殻紋土器の発見」『ひだびと』第三年第一号
- 岐阜県 1972 『岐阜県史』通史編原始
- 岐阜県教育委員会 1990 『岐阜県遺跡地図』
- 岐阜県文化財保護センター 1992 『門坂シズマ遺跡』
- 清見村教育委員会 1989 『はつや遺跡』
- 久々野町教育委員会 1978 『堂之上遺跡 第1～5次調査概報』
 1980 『堂之上遺跡 第6・7次調査報告書』
- 国府町教育委員会 1988 『宮ノ下遺跡』
- 高山考古学研究会 1984 「高根村発見の上ノ山式土器」『岐阜県考古』第9号
- 西田泰民 1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観』4
- 増子康真 1979 「岐阜県宮田遺跡」『東海先史文化の諸段階 (資料編II)』
- 吉田哲夫 1984 「木島系土器群の研究」『考古学研究』第31巻3号

半無

石 器 一 覧 表 (1)

打製石斧

番号	出土区一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石質	挿図番号	備考
1	SK01 - 0 9	III	9.6	4.9	1.6	115.9	短冊	砂岩	26-36	完形
2	B 1 - 4 0	III	(12.2)	(4.9)	2.4	(171.5)	短冊	凝灰岩		欠損
3	B 1 - 4 1	III	(6.1)	(5.7)	(1.9)	(87.2)	短冊	凝灰岩		欠損
4	B 1 - 7 0	IV	10.6	6.4	2.7	208.1	短冊	凝灰岩	26-37	完形
5	B 3 - 4 4	III	13.0	5.1	1.7	147.4	短冊	濃飛流紋岩	26-39	完形
6	B 9 - 1 8	III	(6.7)	(5.2)	(2.0)	(94.0)	短冊	凝灰岩		欠損
7	C 1 - 0 1	III	(11.1)	(6.9)	2.2	(184.1)	?	凝灰岩		欠損
8	C 1 - 0 2	III	9.6	5.1	1.2	69.2	短冊	凝灰岩		完形
9	C 2 - 1 0	III	9.5	5.1	2.1	121.5	撥	凝灰岩		完形
10	C 2 - 3 7	III	(7.1)	4.8	1.5	(66.6)	短冊	凝灰岩		欠損
11	C 8 - 0 2	III	(11.6)	7.5	2.6	(228.1)	撥	凝灰岩		欠損
12	C 8 - 0 3	III	(11.0)	5.4	2.0	(189.4)	短冊	凝灰岩		欠損
13	C 8 - 0 9	III	13.2	5.9	2.9	276.0	短冊	凝灰岩		完形
14	C 9 - 4 1	III	(10.0)	5.4	2.5	(161.6)	短冊	凝灰岩		欠損
15	C 9 - 4 2	III	13.3	7.6	3.4	349.3	撥	凝灰岩	26-40	完形
16	D 1 - 1 1	IV	(11.1)	5.9	1.9	(150.4)	短冊	凝灰岩		欠損
17	D 1 - 3 7	IV	(9.9)	6.0	(2.6)	(224.7)	短冊	凝灰岩		欠損
18	D 1 - 3 8	IV	(6.3)	5.2	(1.3)	(66.8)	短冊	凝灰岩		欠損
19	D 2 - 1 9	III	(9.4)	4.6	2.5	(144.7)	短冊	凝灰岩		欠損
20	D 2 - 3 8	III	(11.1)	7.3	3.2	(378.7)	短冊	砂岩		欠損
21	D 2 - 0 7	IV	(7.7)	6.0	1.8	(99.1)	短冊	濃飛流紋岩		欠損
22	D 2 - 3 3	IV	(8.5)	4.5	1.9	(105.2)	短冊	凝灰岩		欠損
23	D 3 - 0 4	III	(7.8)	5.4	1.7	(105.5)	短冊	砂岩		欠損
24	D 3 - 0 9	III	13.4	7.9	2.9	(349.5)	撥	凝灰岩		一部欠損
25	D 3 - 1 0	III	(7.0)	(7.5)	(2.8)	(155.6)	?	凝灰岩		欠損
26	D 3 - 1 1	III	(5.4)	(7.1)	(3.1)	(158.9)	?	凝灰岩		欠損
27	D 3 - 2 3	III	(5.6)	(4.9)	(1.0)	(45.4)	短冊	凝灰岩		欠損
28	D 3 - 0 6	IV	(14.5)	(7.5)	2.9	(308.0)	短冊	濃飛流紋岩		欠損
29	D 3 - 0 7	IV	(8.5)	4.8	1.4	(72.5)	短冊	砂岩		欠損
30	D 7 - 0 1	III	(8.1)	(7.2)	(2.3)	(169.3)	短冊	濃飛流紋岩		欠損
31	D 7 - 0 8	III	(6.4)	6.7	(1.5)	(64.7)	撥	凝灰岩		欠損
32	D 7 - 0 9	III	(7.8)	5.0	2.3	(89.7)	短冊	凝灰岩		欠損
33	D 7 - 1 6	III	(6.3)	4.1	(1.2)	(46.0)	短冊	凝灰岩		欠損

石器一覧表(2)

番号	出土区—番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石質	挿図番号	備考
3 4	D 7 - 1 7	III	(9.2)	(6.6)	2.0	(170.3)	短冊	凝灰岩		欠損
3 5	E 1 - 1 5	III	(7.3)	(5.1)	(1.2)	(47.3)	短冊	凝灰岩		欠損
3 6	E 1 - 2 3	III	(7.6)	(4.6)	1.5	(60.2)	短冊	凝灰岩		欠損
3 7	E 1 - 2 5	III	(7.6)	3.8	1.3	(45.6)	短冊	凝灰岩		欠損
3 8	E 1 - 0 1	IV	(10.9)	6.2	2.1	(192.6)	短冊	石英安山岩		欠損
3 9	E 1 - 0 2	IV	(9.6)	5.1	1.4	(95.1)	短冊	砂岩		欠損
4 0	E 1 - 4 6	V	12.6	5.1	2.1	161.4	短冊	凝灰岩	26-38	完形
4 1	E 1 - 4 7	V	(6.7)	5.0	(1.6)	(55.3)	短冊	凝灰岩		欠損
4 2	E 2 - 0 7	III	(8.0)	(6.6)	2.2	(136.4)	短冊	凝灰岩		欠損
4 3	E 2 - 0 9	III	13.8	8.2	2.7	393.1	撥	濃飛流紋岩	26-41	完形
4 4	E 2 - 1 0	III	14.4	7.4	3.7	463.8	撥	砂岩	26-42	完形
4 5	E 2 - 1 1	III	(8.8)	(5.4)	(2.4)	(127.7)	短冊	凝灰岩		欠損
4 6	E 8 - 0 1	III	10.4	4.6	1.8	121.7	短冊	凝灰岩		完形
4 7	E 8 - 0 2	III	(7.8)	4.5	1.5	(76.2)	短冊	凝灰岩		一部欠損
4 8	F 2 - 0 1	III	(11.1)	4.9	1.3	(89.7)	短冊	凝灰岩		一部欠損
4 9	F 2 - 0 2	III	(9.2)	5.4	2.0	(118.8)	短冊	凝灰岩		欠損
5 0	F 2 - 2 6	V	(7.8)	(5.5)	(1.5)	(79.7)	短冊	凝灰岩		欠損
5 1	F 3 - 0 1	III	(11.1)	(6.1)	(2.6)	(187.9)	短冊	凝灰岩		欠損
5 2	G 2 - 0 1	III	(13.2)	7.2	2.8	(369.2)	短冊	凝灰岩		欠損
5 3	G 3 - 0 3	III	(7.4)	7.5	(1.9)	(150.3)	撥	凝灰岩		欠損
5 4	1 T - 0 1	III	(6.2)	(6.1)	(1.4)	(71.5)	?	凝灰岩		欠損
5 5	表採 - 1 2	?	17.6	6.4	2.7	370.6	短冊	凝灰岩	26-44	完形
5 6	表採 - 4 6	?	11.0	5.9	2.4	195.3	短冊	濃飛流紋岩		完形
5 7	表採 - 6 2	?	15.6	7.4	4.1	593.5	撥	凝灰岩	26-43	完形
5 8	表採 - 6 4	?	(11.8)	8.7	3.6	(453.3)	短冊	凝灰岩		欠損
5 9	表採 - 9 0	?	(5.5)	5.9	(1.7)	(84.8)	短冊	砂岩		欠損

礫石錐（計測部位は渡辺誠「礫石錐計測部位説明図」『阿曾田遺跡発掘調査報告書』（1985）参照）

番号	出土区—番号	層位	a	b	L1	L2	W	S	重さ	石質	挿図番号	備考
1	D 3 - 1 2	III	1.5	2.1	9.4	9.0	6.0	2.2	165.7	石英安山岩	27-49	完形
2	E 1 - 0 1	V	0.8	1.0	5.0	4.8	4.1	1.5	44.1	砂岩	27-45	完形
3	E 3 - 0 1	III	1.4	1.3	7.0	6.8	5.6	2.8	162.3	凝灰岩	27-47	完形
4	E 3 - 0 4	IV	1.0	2.1	6.6	5.8	5.6	2.1	96.6	凝灰岩	27-46	完形
5	表採 - 1 8	?	1.2	1.4	7.1	6.6	6.0	2.2	130.3	凝灰岩	27-48	完形
6	表採 - 1 9	?	1.3	1.4	7.0	6.8	5.0	2.3	100.2	砂岩	27-50	完形

石 器 一 覧 表 (3)

磨石・凹石・敲石

番号	出土区一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	挿図番号	備考
1	B 2 — 3 9	III	13.1	10.1	5.1	934.0	濃飛流紋岩	27—56	完形 凹表1裏1
2	B 9 — 0 1	III	9.4	6.0	3.7	305.7	安山岩	27—52	完形
3	D 2 — 2 6	VI	9.8	7.7	5.7	615.0	濃飛流紋岩	27—53	完形
4	D 3 — 1 3	III	9.6	7.5	3.0	410.0	濃飛流紋岩	27—51	完形
5	D 7 — 1 5	III	10.9	7.8	4.5	570.6	砂岩	27—54	完形
6	E 2 — 0 5	III	13.0	7.7	6.0	858.0	安山岩	27—57	完形 被火熱
7	表採 — 103	?	12.0	9.7	5.5	809.0	安山岩	27—55	完形 凹裏1

石鎚

番号	出土区一番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石質	挿図番号	備考
1	P 1 — 0 1	III	2.5	1.6	0.5	1.9	II	安山岩	23—14	完形
2	P 2 — 2 2	III	2.0	(1.3)	0.3	(0.4)	I c	安山岩	23—6	一部欠損
3	S X — 3 9	III	(2.4)	(1.6)	0.5	(1.1)	III	安山岩		欠損
4	B 3 — 0 2	VI	2.6	(1.4)	0.3	(0.6)	I b	安山岩	23—2	一部欠損
5	B 4 — 1 5	VI	(2.4)	(1.7)	0.5	(1.4)	I b	安山岩	23—3	一部欠損
6	C 1 — 0 5	III	(1.4)	(0.9)	0.2	(0.2)	I d	安山岩	23—9	欠損
7	C 1 — 0 6	III	2.5	2.1	0.7	2.6	III	安山岩		未製品?
8	C 1 — 3 1	IV	1.6	1.4	0.3	0.4	I c	安山岩	23—7	完形
9	C 1 — 2 1	?	2.2	1.7	0.5	1.0	I b	安山岩	23—4	完形
10	C 2 — 1 1	III	(2.0)	1.6	0.5	(1.1)	I d	安山岩		欠損被火熱
11	C 4 — 1 1	VI	(2.4)	(1.4)	0.6	(1.6)	I d	安山岩		一部欠損
12	D 1 — 3 6	IV	(1.9)	(1.2)	0.3	(0.4)	I d	安山岩		欠損
13	D 1 — 6 3	IV	(1.8)	(1.3)	0.2	(0.3)	I c	安山岩		欠損
14	D 2 — 8 5	III	2.4	1.3	0.3	0.6	I d	安山岩	23—10	完形
15	D 2 — 0 4	V	(3.2)	1.6	0.4	(1.4)	IV	安山岩	23—15	一部欠損
16	E 1 — 0 3	IV	2.3	1.1	0.3	(0.6)	I b	安山岩	23—5	一部欠損
17	E 1 — 6 7	V	(1.9)	1.7	0.4	(1.3)	II	安山岩		一部欠損
18	E 1 — 6 8	V	(2.9)	(1.2)	0.5	(1.3)	I d	安山岩	23—11	欠損
19	E 3 — 0 2	IV	(1.4)	(1.0)	0.2	(0.1)	I c	安山岩	23—8	欠損
20	F 1 — 1 0	III	(1.7)	1.4	0.4	(0.6)	I d	安山岩		欠損
21	表採 — 0 8	?	(1.4)	(1.2)	0.3	(0.4)	I d	安山岩	23—12	欠損
22	7 1	?	1.6	(1.5)	0.4	(0.5)	I e	安山岩	23—13	一部欠損
23	8 3	?	(2.1)	(0.9)	(0.3)	(0.4)	I b	安山岩		欠損
24	9 8	?	(1.2)	(1.1)	0.4	(0.3)	I c	安山岩		欠損
25	111	?	(1.5)	(1.1)	0.2	(0.2)	I a	チャート	23—1	欠損

石器一覧表(4)

ピエス・エスキュー

番号	出土区—番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	挿図番号	備考
1	P 6 — 6 6	III	2.7	2.4	0.9	4.2	安山岩		下呂石
2	P 6 — 6 9	III	2.8	1.7	1.2	4.2	安山岩		下呂石
3	B 1 — 2 9	III	2.6	3.2	1.0	7.2	安山岩		下呂石
4	B 1 — 9 4	III	4.4	3.6	1.1	20.0	チャート	23-19	
5	B 1 — 4 8	IV	3.4	2.2	0.7	4.1	安山岩		下呂石
6	B 2 — 5 2	III	3.3	1.7	1.3	8.1	安山岩		下呂石
7	B 2 — 4 4	IV	2.7	1.9	0.8	3.3	安山岩		下呂石
8	B 3 — 1 7	IV	3.7	2.0	1.1	7.1	安山岩		下呂石
9	B 4 — 1 4	VI	2.7	2.1	0.8	4.7	安山岩		下呂石
10	B 4 — 1 6	VI	4.8	2.4	1.1	13.1	安山岩		下呂石
11	C 1 — 1 0	?	2.4	2.6	1.2	5.7	安山岩		下呂石
12	C 2 — 4 0	IV	3.2	1.8	1.0	4.3	安山岩		下呂石
13	D 1 — 4 3	III	2.6	2.4	1.1	7.0	安山岩		下呂石
14	D 1 — 0 2	V	2.7	2.8	1.0	6.8	安山岩		下呂石
15	D 2 — 2 3	III	2.7	2.2	1.3	6.7	安山岩	23-21	下呂石
16	D 2 — 7 1	III	2.6	2.8	0.8	4.0	安山岩	23-20	下呂石
17	D 2 — 1 6	IV	2.6	1.8	0.7	2.5	安山岩		下呂石
18	E 1 — 5 5	V	3.3	1.4	0.6	2.8	安山岩		下呂石
19	E 2 — 0 2	III	2.4	1.8	0.7	3.1	安山岩		下呂石
20	E 2 — 2 7	V	2.6	2.0	0.6	2.6	安山岩		下呂石
21	表採 — 2 7	?	3.1	1.7	0.5	2.2	安山岩		下呂石
22	表採 — 3 4	?	3.3	2.4	1.1	7.0	安山岩		下呂石
23	表採 — 3 5	?	2.4	3.4	1.3	8.8	安山岩		下呂石

削器

番号	出土区—番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	挿図番号	備考
1	B 2 — 125	III	5.2	5.6	1.1	33.1	安山岩	24-24	下呂石
2	B 3 — 1 5	IV	6.1	3.6	1.0	19.8	安山岩	24-22	下呂石
3	C 1 — 6 9	III	3.3	3.1	1.1	11.4	安山岩		下呂石
4	D 4 — 0 2	III	5.6	4.1	1.3	25.6	安山岩	24-23	下呂石
5	E 1 — 4 9	V	2.5	3.0	0.9	6.3	安山岩		下呂石

搔器

番号	出土区—番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	挿図番号	備考
1	E 1 — 6 6	V	3.1	2.9	0.6	6.8	安山岩	24-26	下呂石
2	E 4 — 0 1	V	2.8	2.5	0.8	6.2	黒曜石	24-25	

石器一覧表(5)

石錐

番号	出土区一番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	分類	石質	挿図番号	備考
1	C 3 — 0 1	IV	(2.8)	1.8	(0.5)	(1.2)	I	安山岩	23—16	欠損下呂石
2	D 1 — 4 6	IV	3.1	(1.3)	0.6	2.1	II b	安山岩		欠損下呂石
3	D 2 — 2 0	II	2.2	2.7	0.6	3.0	III	チャート	23—18	完形
4	D 2 — 2 2	III	(2.5)	2.1	(0.6)	(2.7)	I	安山岩		欠損下呂石
5	F 2 — 0 3	III	3.2	(1.1)	0.7	(2.4)	II b	安山岩		欠損下呂石
6	表採 — 6 9	?	3.7	0.8	0.6	1.4	II a	チャート	23—17	完形
7	表採 — 7 0	?	(2.1)	0.6	0.4	(0.4)	?	安山岩		欠損下呂石

U F

番号	出土区一番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	挿図番号	備考
1	SK 1—1 5	III	3.1	3.9	1.1	7.8	安山岩		下呂石
2	B 3 — 0 1	VI	5.9	2.9	1.3	15.7	安山岩		下呂石
3	B 9 — 1 2	III	4.2	4.5	1.4	26.4	安山岩		下呂石
4	C 1 — 0 7	III	3.9	4.4	1.1	14.8	安山岩		下呂石
5	C 4 — 0 8	VI	2.8	5.0	0.9	10.2	安山岩		下呂石
6	C 7 — 0 1	III	4.2	4.1	1.4	9.9	安山岩	24—27	下呂石
7	D 2 — 1 2	IV	3.0	2.3	0.5	3.7	安山岩		下呂石
8	D 4 — 0 3	VI	3.6	3.3	0.8	9.0	安山岩		下呂石
9	D 7 — 1 3	III	3.2	4.5	1.2	11.7	安山岩		下呂石
10	E 1 — 0 5	III	4.0	2.6	0.9	7.1	安山岩		下呂石
11	E 1 — 0 7	V	3.3	1.9	0.7	4.0	安山岩	24—28	下呂石
12	E 2 — 3 5	III	2.5	1.3	0.7	1.7	安山岩		下呂石
13	E 3 — 0 3	III	3.6	4.2	0.7	9.0	安山岩		下呂石
14	F 3 — 0 2	IV	3.2	1.5	0.6	2.2	チャート		
15	表採 — 109	?	2.7	2.3	0.8	6.7	チャート		

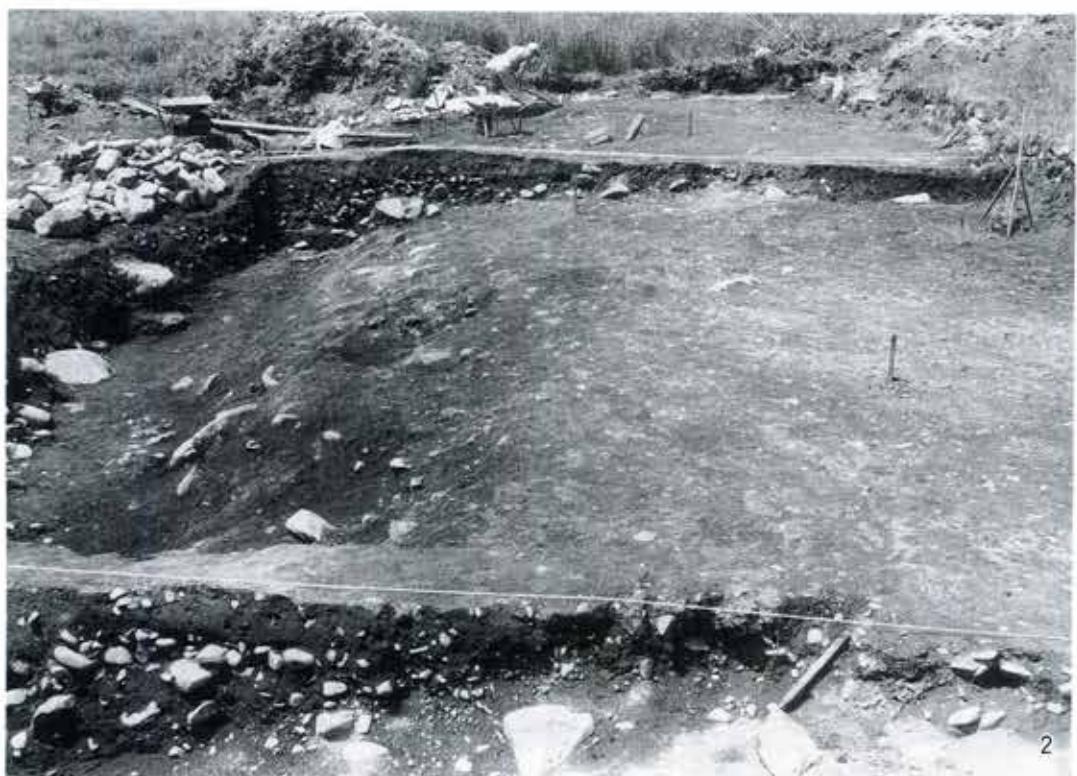
R F

番号	出土区一番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	挿図番号	備考
1	B 2 — 0 3	IV	2.2	2.1	0.5	2.0	安山岩		下呂石
2	B 3 — 4 9	III	2.9	2.0	0.7	2.7	安山岩		下呂石
3	B 3 — 5 1	III	1.9	2.3	0.9	3.1	安山岩		下呂石
4	C 3 — 0 1	VI	1.6	1.9	0.4	1.6	チャート		
5	D 3 — 2 4	III	6.0	4.9	1.2	25.1	安山岩	24—29	下呂石
6	D 4 — 6 2	VI	3.2	1.8	0.4	2.6	チャート		
7	D 7 — 0 4	III	3.4	1.9	0.5	3.1	安山岩		下呂石
8	E 2 — 0 1	IV	2.6	2.7	0.6	2.7	黒曜石	24—30	

図 版



1. 発掘前全景 2. 遺跡全景



1. 調査区南部 2. 調査区北部



1

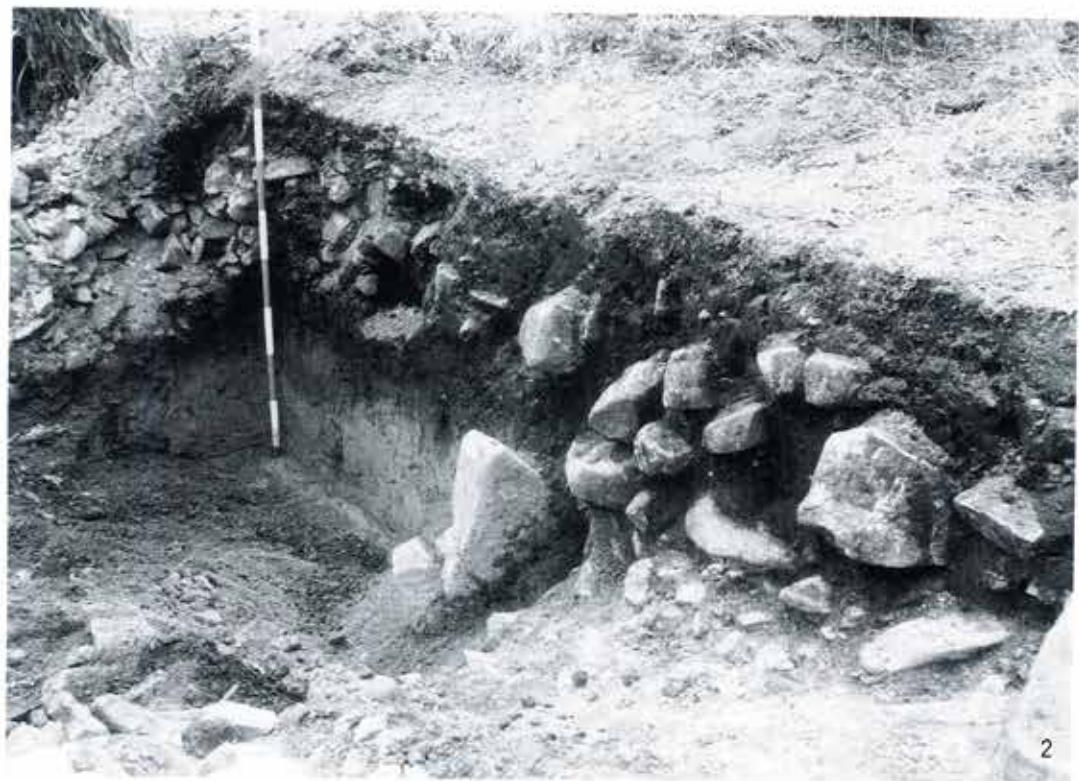


2

1. 第1トレンチ 2. 第2トレンチ



1



2

1. 第3トレンチ 2. 第4トレンチ



1



2

1. 第5トレンチ 2. 第6トレンチ



1. 第7トレンチ 2. 第8トレンチ



1



2

1. 調査区南壁 2. 中央トレンチ



1



2

1. 溝状遺構 (S D 1)・ピット群(1) 2. 溝状遺構 (S D 2)



1



2



3



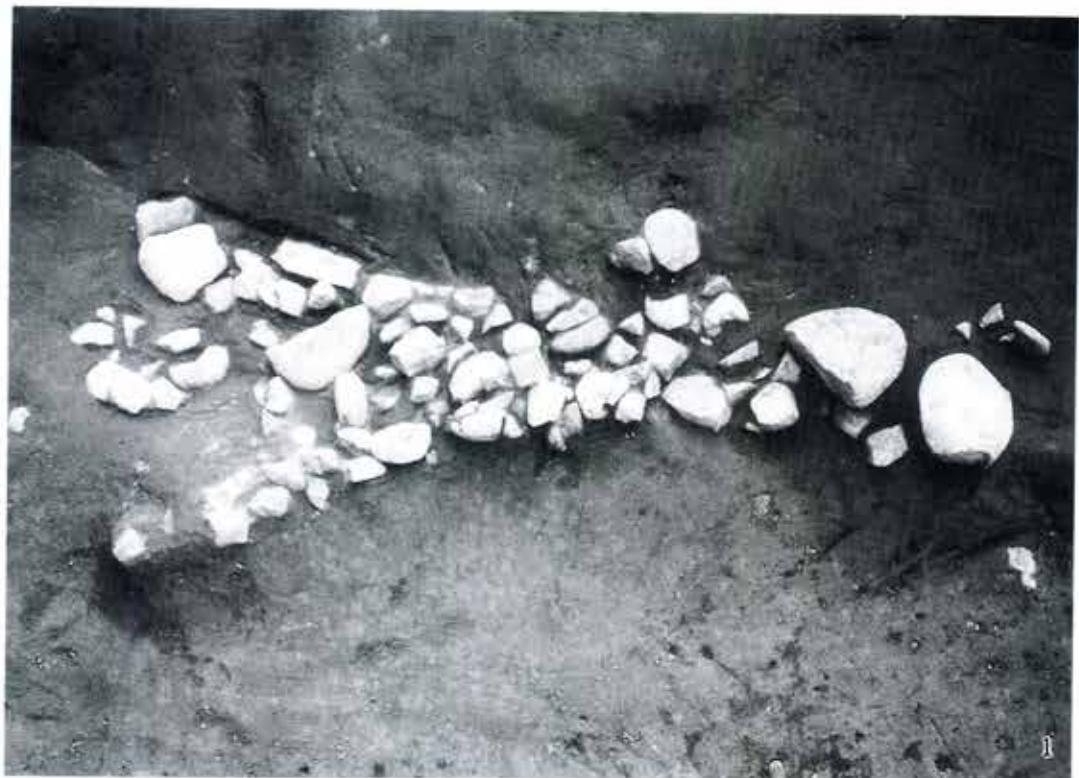
4



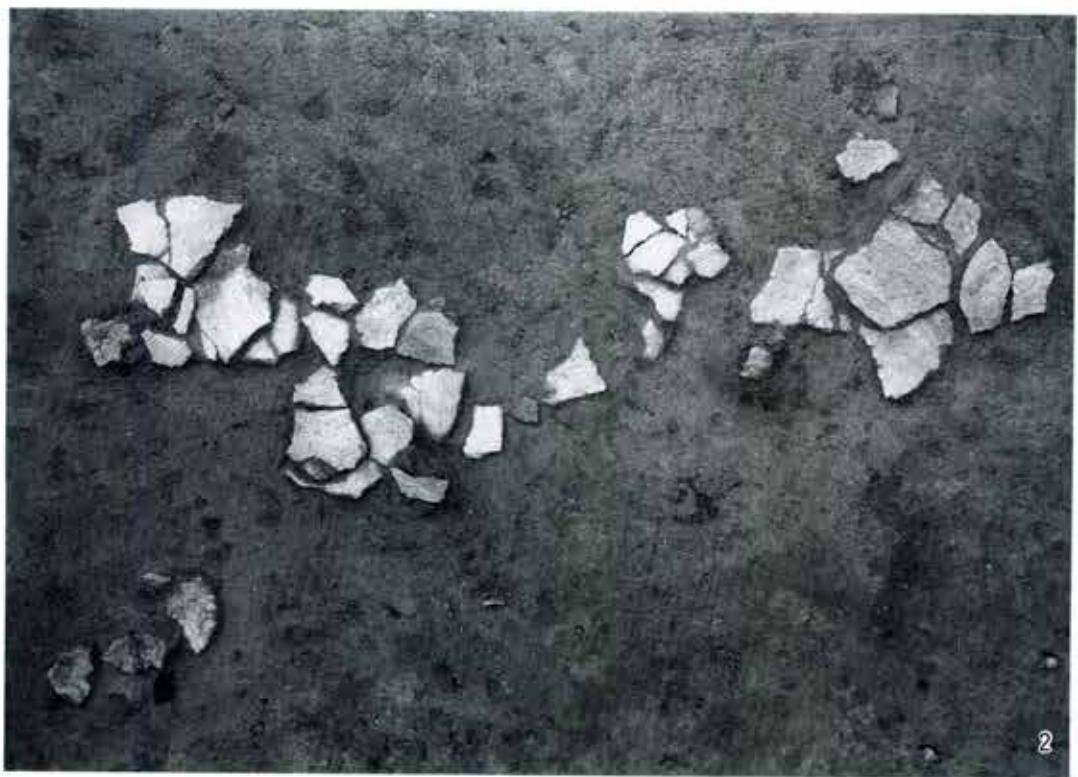
5

1. SK 1 2. SK 1 (下部) 3. ピット群(2)

4. ピット9・10 5. 作業風景



1

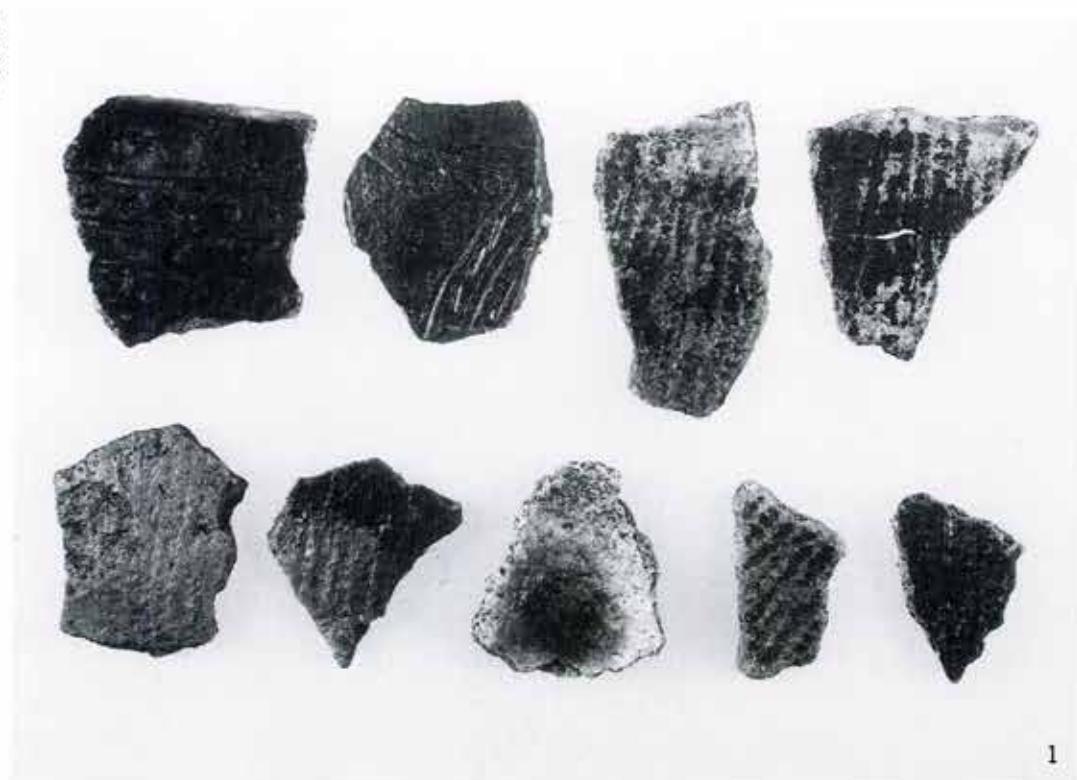


2

1. 配石遺構 2. 繩文土器出土状況



1・2. 遺構出土の縄文土器(1)



1



2

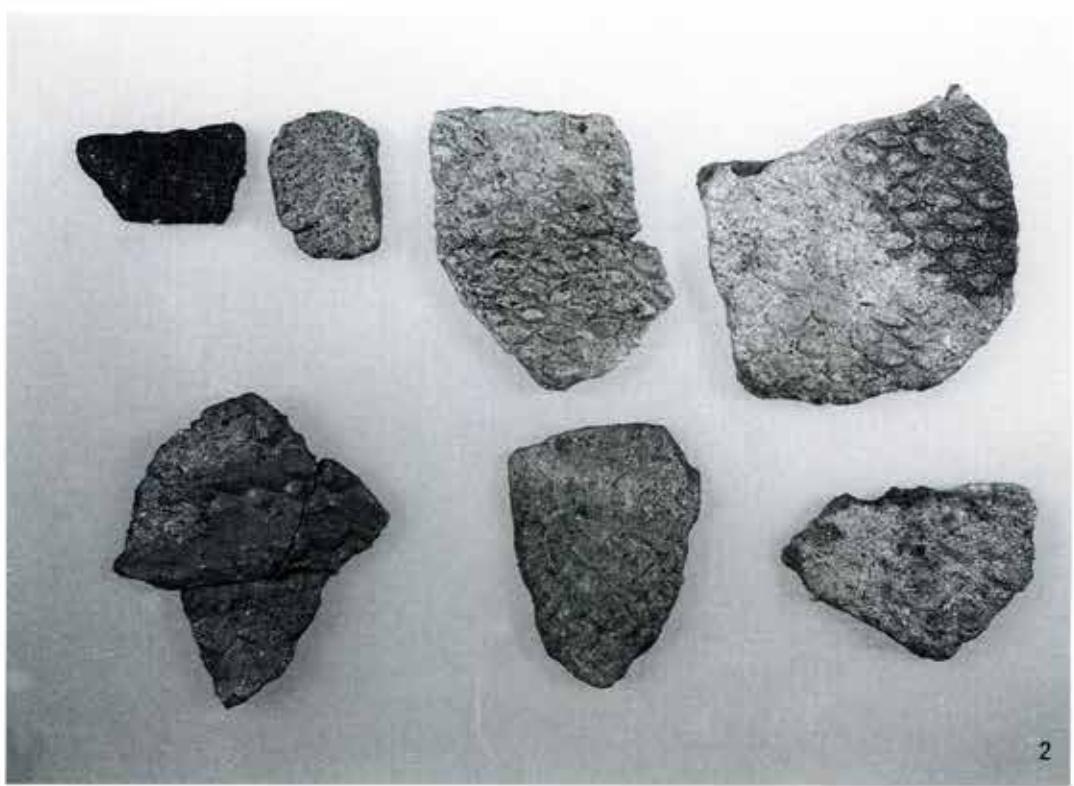
1・2. 遺構出土の縄文土器(2)



1・2. 遺構出土の縄文土器(3)



1



2

1. 遺構出土の縄文土器(4) 2. 縄文土器 第Ⅰ群(1)



1



2

1・2. 縄文土器 第Ⅰ群(2)



1

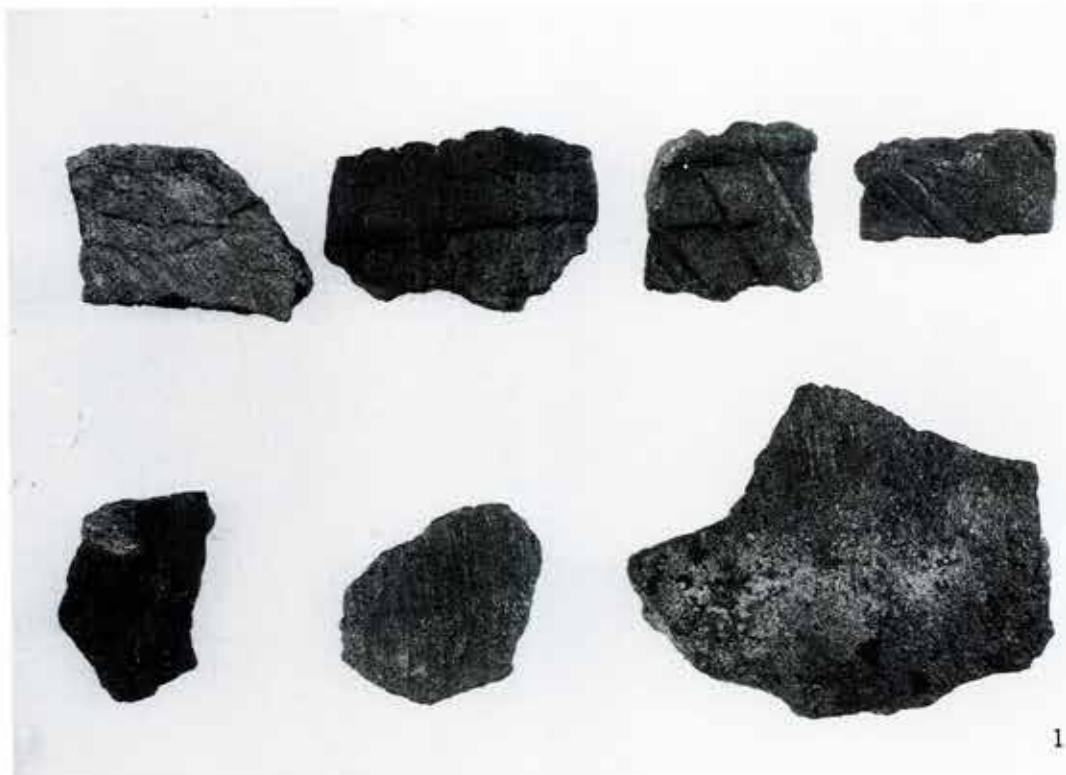


2



3

1・2・3. 縄文土器 第I群(3)



1

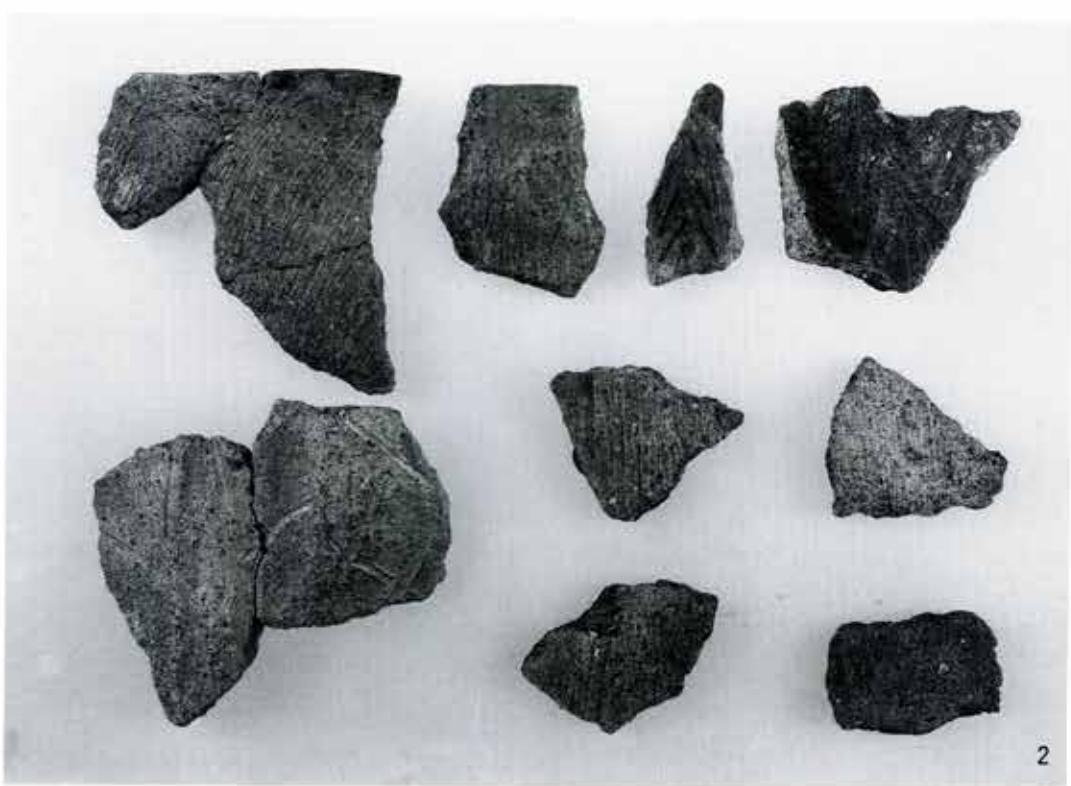


2

1. 縄文土器 第II群 2. 縄文土器 第III群(1)

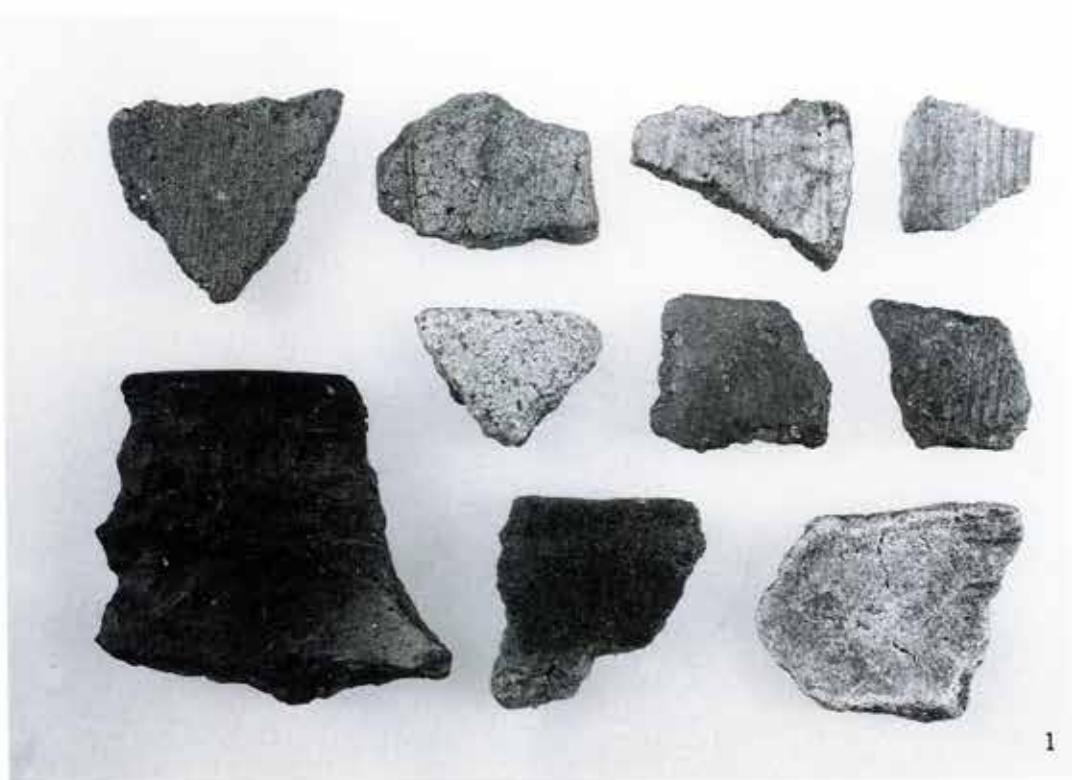


1

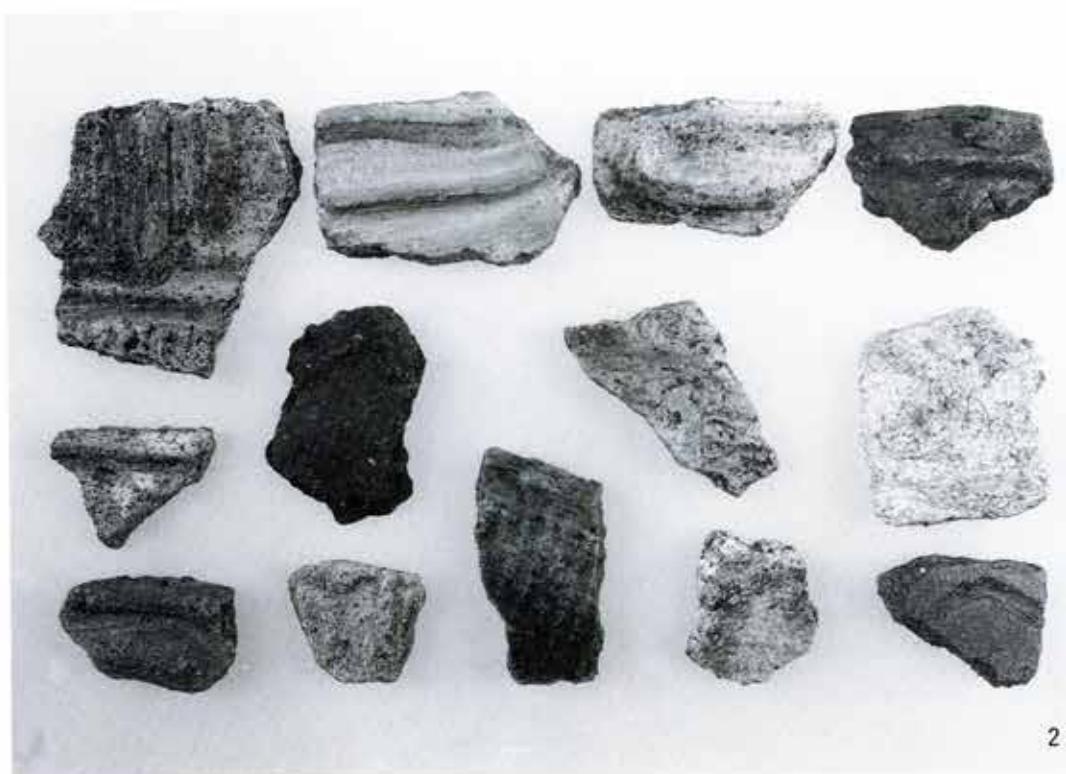


2

1・2. 縄文土器 第III群(2)

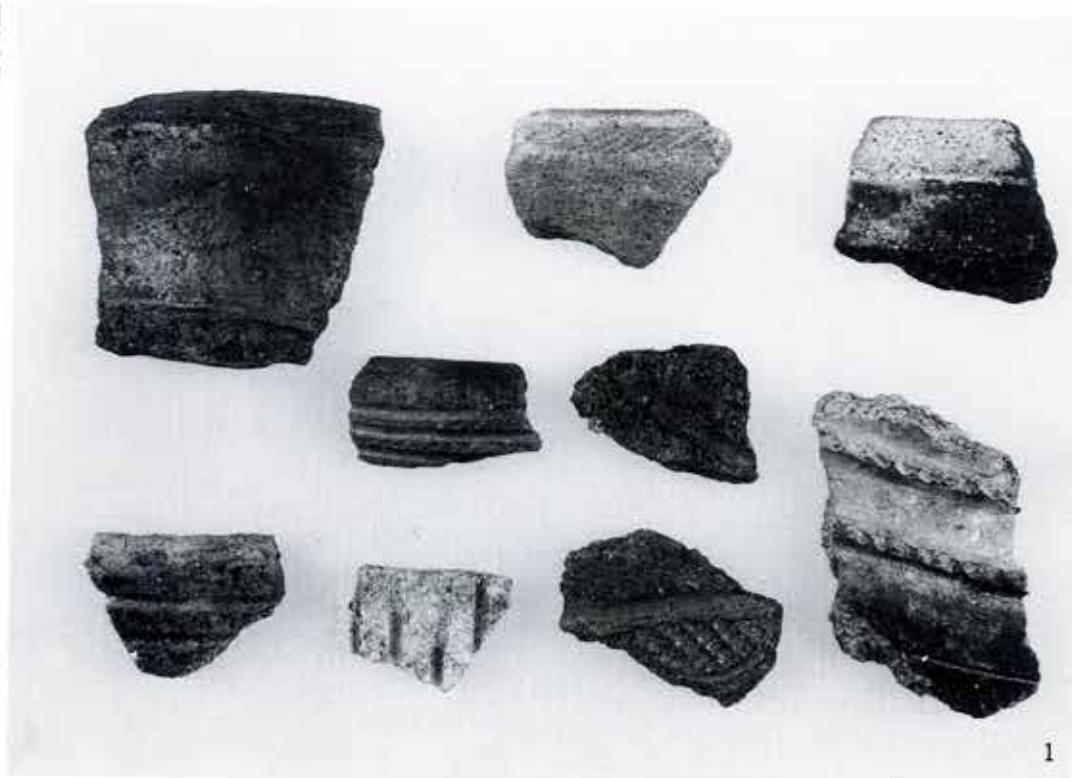


1



2

1. 縄文土器 第III群(3) 2. 縄文土器 第IV群(1)



1



2

1・2. 繩文土器 第IV群(2)

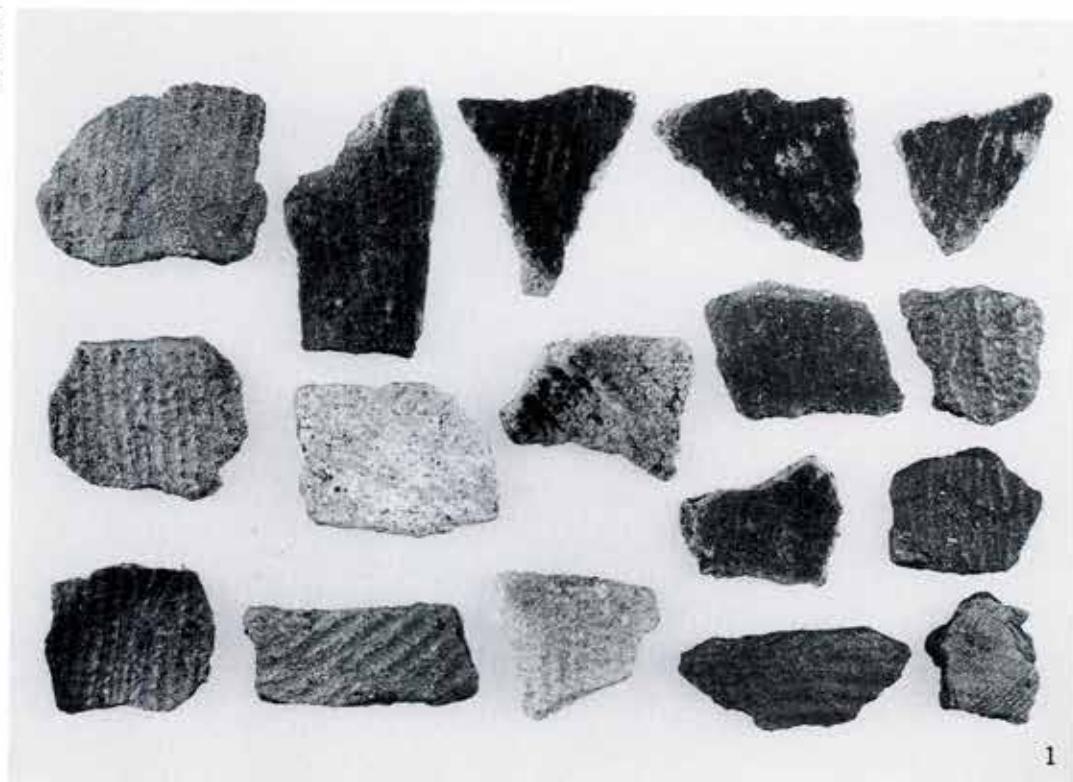


1



2

1. 縄文土器 第IV群(3) 2. 縄文土器 第V群(1)



1

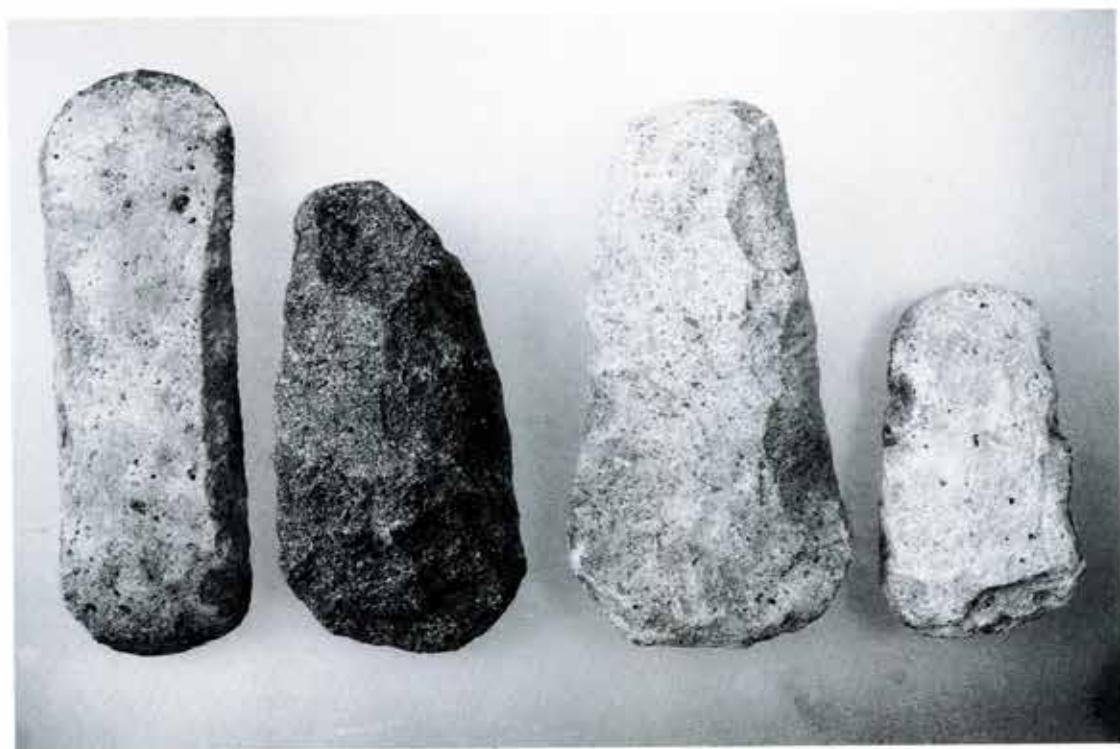


2

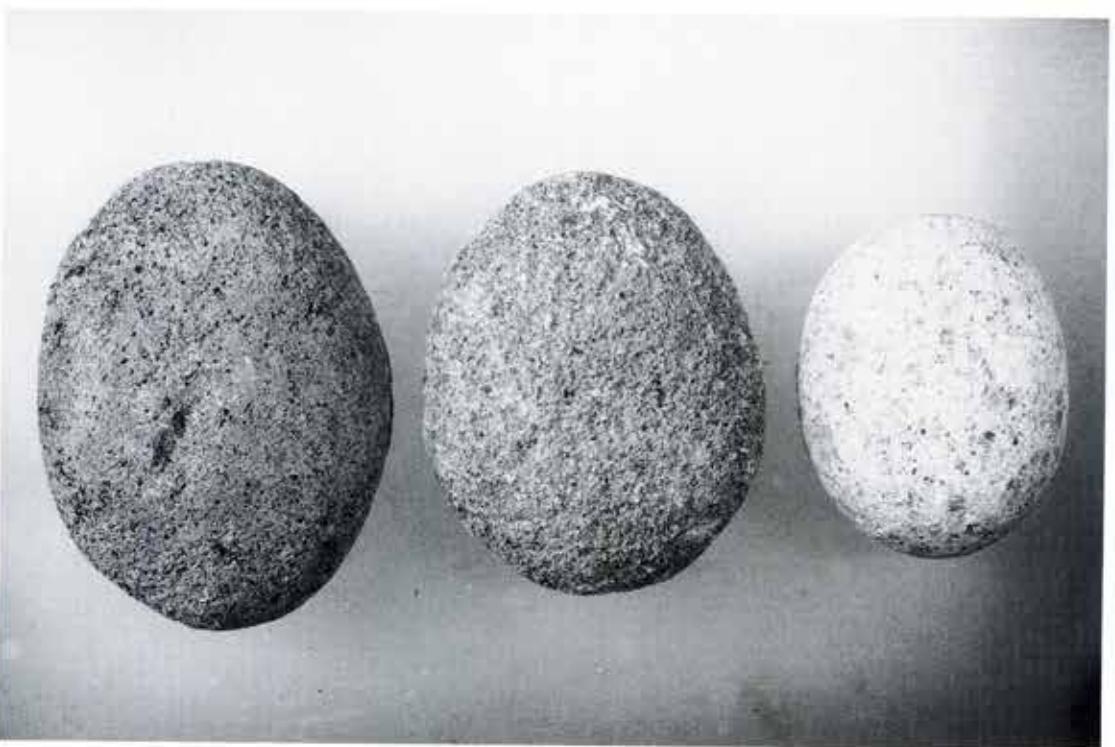
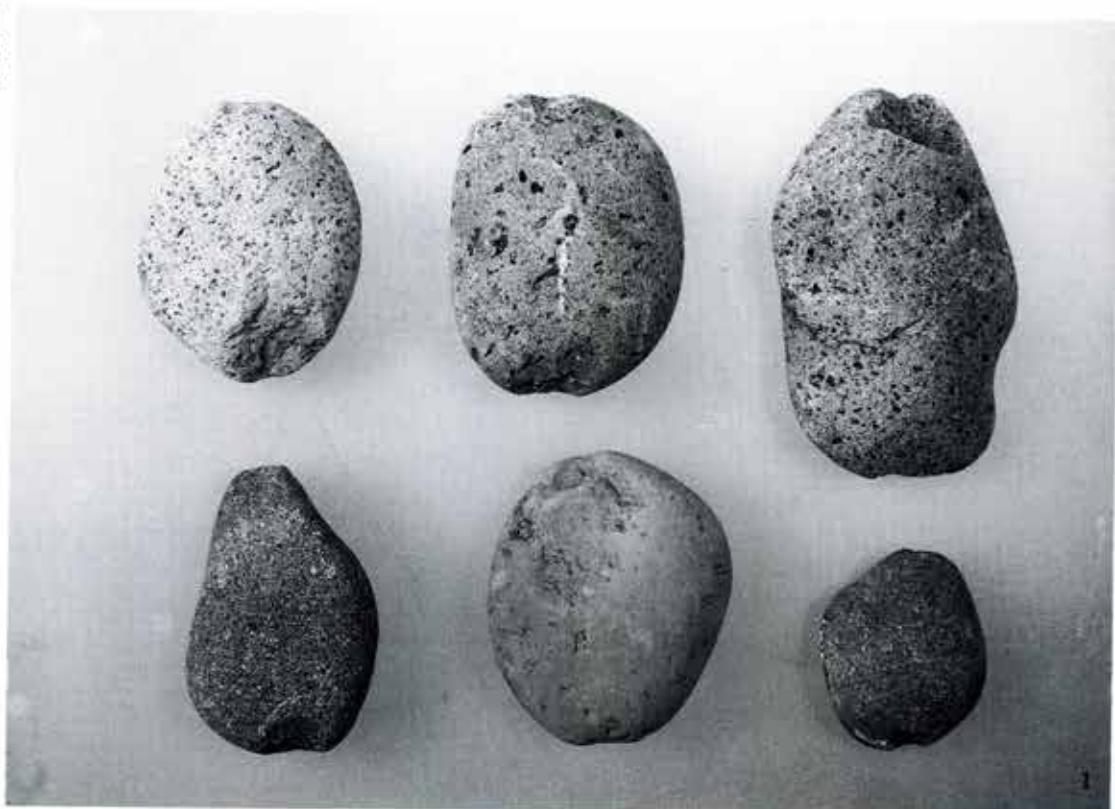
1. 繩文土器 第V群(2) 2. 繩文土器 第VI群



1



1. 石器 石鎚石錐 2. 石器 打製石斧



1. 石器 石鐵 2. 石器 磨石類



1·2. 堂之上遺跡 6号住居址出土土器 3. 堂之上遺跡 36号住居址出土土器

4. 堂之上遺跡 26号住居址出土土器



1. 堂之上遺跡 14 号住居址埋甕 2. 洄遺跡出土土器

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第7集 藤原遺跡
執筆者	上嶋 善治 岩田 修
発行所	財團法人岐阜県文化財保護センター
発行年月	1993年3月
遺跡名	藤原遺跡
読み	ふじわらいせき
所在地	岐阜県 大野郡 久々野町 畏 ナトシロ
調査原因	一般国道41号線長淀局部改良事業
種別	散布地（溝状遺構・土壙跡・配石遺構）
時代	縄文（早・前・中・後）

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第7集

藤原遺跡

1993年3月25日 印刷

1993年3月31日 刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡穗積町牛牧宮下 395

財團法人 岐阜県文化財保護センター

印 刷 西濃印刷株式会社

正誤表（藤原遺跡）

誤

正

目次	5行目 第1節 遺跡の立地	第1節 地形・地質
	21行目 第3節 飛驒の早期条痕文系土器	飛驒における早期条痕文系土器について
37頁	28行目 白色を呈するチャート製である。	乳白色を呈するチャート製である。全面に調整剥離が施され、剥片の素材面はほとんど残らない。上下両端の刃部は磨耗している。
38頁	1行目 乳白色を呈するチャート製である。 全面に調整剥離が施され、剥片の 素材面はほとんど残らない。上下 両端の刃部は磨耗している。	赤褐色を呈するチャート製である。
	29行目 1・2は、	31・32は、
	32行目 1は、	31は、
	33行目 3は、	33は、
41頁	1行目 3の	33の
	3行目 4は、	34は、
	5行目 5は、	35は、
	17行目 は敲石	57は敲石
46頁	22行目 見られた1)。	見られた。
49頁	33行目 みられた ²⁾ 。	みられた」 ²⁾
50頁	29行目 なっている。	なっている ³⁾ 。
	33行目	3)掲載した土器実測図は文献（大江1965） より作成。